

翻
訳

A Trial to Translate Volubly Hegel's "Phaenomenologie des
Geistes" 3

HARASAKI Michihiko

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

I translate page 322 to page 376 of the original text.

ヘーゲル『精神現象学』饒舌訳の試み 3

原
崎
道
彦
(高知大学教育学部)

それゆえ、ここですがたをあらわす善なるもの、つまり普遍的なものとは、素質、才能、能力と呼ばれているもろもろのものである。それは精神的なものひとつのありかたであり、そこでは精神的なものはひとつの普遍的なものとして思い浮かべられるのだが、その普遍的なものとは、生命（いのち）を与えられ、運動をおこなうのに、個人としてふるまうという原理を必要とし、個人としてふるまうときに現実のものとなるような普遍的なものなのである。その原理が徳の意識においてはたらくときは、普遍的なものはその原理によって、善い用いかたをされるのだが、その原理が世の中ではたらくときは、普遍的なものはその原理によって悪用されることになる。――【322】つまり、普遍的なものは、自由にふるまう個人の手によって支配される受動的な道具となるのである。その道具は、自由にふるまう個人によって自分ごどのように使用されるかについて無関心であり、普遍的なものを破壊するような現実を生み出すために悪用されるということもありえるのである。それは生命（いのち）を欠き自立性を欠いた素材であり、どのようにでも加工されることのあるものであり、みずから破壊させるようなものにさえ加工されうることのあるものなのである。

普遍的なものが徳の意識にとつても世の中にとつても同じように意のままになるものである限りで、徳がどのような武器を装備されようと、徳が悪徳に打ち勝つことになるかどうかは見極めがつかない。両者が手にしている武器は同一なのである。つまり、先に述べたような才能とか能力といった武器である。確かに、徳は、自分が目指す目標と世の中の本質とはもともと統一されたものとしてあるということを通じてはいるし、そうした信念を隠し持っている。そしてその統一が、闘争のさなかで敵の背後を突くはずだし、自分が目指す目標の実現を自分にもたらしめてくれるはずなのである。ところがそのことのために、実際には、徳の騎士にとつては、自分が担う徳や闘争といったものは、結局のところ、すべてんなのであり、真面目に取り組むことができないうものなのである。なぜならば、徳の騎士が自分のほんとうの強みとしているのは、善なるものがそれそのものとして自分のちからで存在するということ、つまり、善なるものは自分自身を実現するものとしてある、ということだからである。――つまりこのすべてんは、徳の騎士は真面目に取り組むことができないうだけでなく、真面目に取り組んではならないものでもある

のである。徳の騎士が自分が敵に立ち向かわせているものとして見いだすもの、そして敵が自分に立ち向かわせているものとして見いだすもの、そしてのさいに徳の騎士が自分においても敵においてもあえて消耗させ傷つけているものは、善なるものそのものであるはずはない。それを維持し実行するために徳の騎士は闘っているのだから。――【323】徳の騎士が自分においても敵においてもあえて消耗させ傷つけているものは、もろもろの素質や才能という、どうでもいいものなのである。けれども、実際には、素質や才能といったものは、消耗させられ傷つけられるべきものでさえないのだ。それらは、個人としてふるまうということをおこなう普遍的なものに他ならないのであり、むしろ、個人がおこなう闘争をおして獲得され、現実化されるべきものに他ならないのである。――しかし、普遍的なものは、個人がおこなう闘争をおして獲得され、現実化されるべきものであるのと同時に、闘争の概念そのものによって、そのまま既に現実化されたものとしても存在しているのである。そのようにして既に現実化したものとしてあるのがそのものであり、普遍的なものなのだが、普遍的なものが現実化するということがどういうことかと言うと、普遍的なものが、そのものとして存在するのと同時に、他者にたいしても存在する、ということにほかならない。先ほど述べたように、普遍的なものは二つの側面をもつものとしてあり、普遍的なものはその二つの側面のいずれか一方にしたがい抽象されたものとなつていたわけなのだが、普遍的なもの二つの側面が互いに互いから分離されることはもはやなくなり、闘いのさなかで、そして闘いをおして、善なるものが同時にいずれのしかたにおいても立てられることになる。――しかし徳のある意識は闘いのさなかで、善なるものとは反対のものとしてある世の中に対立するものとしてあらわれる。そのさい闘いが徳のある意識に提供するものは普遍的なものであるわけけれども、その普遍的なものはや抽象的な普遍的なものではなく、個人のふるまいによって生命（いのち）を与えられた普遍的なものであり、そして、他者にたいして存在するもの、つまり、現実となった善なるものなのである。それなので、徳が世の中の触れるとき徳が会おうのはつねに、善なるものそのものが存在する場所なのであり、そのとき善なるものは、世の中のそのものとしてあり、世の中でおきる現象のすべてに分かちがたく貼りつけられ、世の中の現実のひとつひとつのうちに

存在している。それなので世の中は徳にとって傷つけることができないものとしてあることになる。かつては徳の側にも徳自身の手によって善なるものへ捧げられ、善なるものために犠牲にされなければならぬものもろもろの契機が存在していたが、それらの契機も、善なるものもろもろの存在なのであり、それゆえ、善なるものもろもろのふるまいとして傷つけられることがあってはならないものである。そのため、闘うことにできるのは【324】、保全すべき犠牲にすべきのあいだで動揺することだけなのである。つまり、自分のものを犠牲にすることも敵を傷つけることもできないのである。徳が、闘いにおいて剣を血でぬらさないようにすることだけを大切にしている闘士に似ているだけではない。徳が始めた闘いと、武器を傷つけることなく保全するための闘いでもあったのである。徳は自分もつ武器を使用することができないだけではない。敵がもつ武器を傷つけてはならないのであり、敵がもつ武器を自分がおこなう攻撃から守りもしなければならぬのである。というのも、自分もつ武器も敵がもつ武器もすべて善なるもの的高貴な一部分なのであり、徳が闘いを始めたのはその善なるもののためだったからである。

ところが、敵にとって本質であるのは、そのものではなく、個人としてふるまうことなのである。それゆえ敵のもつ力は、否定的な原理を原理としているところにある。この原理にとつては何ものも存在を続けることではないし、何ものも絶対に神聖ということはない。この原理は、ありとあらゆるものを喪失することをためらわないし、それに耐えることができる。そのため敵は自分もつ力によってだけでなく、敵にはむかう者が巻き込まれる矛盾によつても、確実に勝利を手に入れる。徳にとつてそのものであるものが、世の中にとつては、世の中にとつてそうであるものでしかないのである。徳にとつて固定的なものとしてあり、徳が縛りつけられているいかなる契機からも、世の中は自由なのである。そうした契機は世の中にとつては、自分が廃棄することも存続させることもできるような意味しかもたないものとしてあり、そのため世の中はそうした契機を意のままにすることができるし、それだから、そうした契機に縛りつけられている徳の騎士をも意のままにすることができるのである。徳の騎士にはそうした契機を、上にまとったコートを脱ぐようには手放すことはできないのであり、そうした契機を置き去り

にして自由にふるまうことはできない【325】。徳の騎士にとつてそうした契機は手放すわけにゆかない本質だからだ。

おしまいに、善なるものとしてのそのものが待ち伏せ場所に隠れていて、そこから狡猾に世の中の背後を襲うといったことはないのか、ということに触れておくとすると、そうした願望はそのものとしてまったく空しい。世の中は、何ものかが自分の背後に近づくことを許さず、周囲に対して注意をおこたることがない目覚めた意識なのであり、自分がそうした存在であることを確信している。というのは、すべてのできごとが世の中にたいして存在するものとしてあり、すべてのものが世の中の目の前に存在するものとしてあるという、そうしたものとして世の中は存在するからである。が、善なるものとしてのそのものは、そうではない。自分の敵にたいして存在するものであるならば、我々がさきに見たような闘いにひきこまれることになるし、かといって、敵にたいして存在するものとしてあるのではなく、そのものとして存在するものとしてある場合でも、もろもろの素質や才能といった受動的な道具、現実性を欠いた素材でしかなく、徳の騎士や世の中の意のままとなっている。もろもろの素質や才能といったものとして思い浮かべられるとき、そのものは、世の中が目覚めた意識であるのとは異なり、まだろんだ意識であり、もろもろの素質や才能の背後の、どことも言えないようなところでまどろみ続けているのである。

それだから徳は世の中に打ち倒されることになる。そのそもその理由を考えると、徳が目的としているものが、実際には、抽象的で非現実的な本質であるということがあり、現実的なものとしてあるということのかかわりで言えば、徳がおこなっている行為が依拠している区別が、つまり、現実的なものとしてあるということと個人としてふるまうということとの区別が、たんなる言葉の上でのものでしかないということがある。徳がおこなおうとしているのは、個人としてふるまうということを犠牲にすることによって、善なるものを現実的なものにするだけであるのだけれども、現実的なものとしてあるという側面は、個人としてふるまうという側面にほかならないのである。徳によれば、善なるものはそのものとしてあるものであり、存在するものに対立するものである。けれども、そのものが実在するということがどういうことなのか、そのもののほんとうのありかたとはどのようなものなの

か、ということから言えば、そのものは存在にほかならないのである。そのものとは【326】何よりも、現実のありかたから本質を切り離し抽象したものである。けれども、抽象されたものというのは、ほんとうの意味で存在するものではなく、意識にたいしてしか存在しないものなのである。そしてそのことが意味するのが、そのものとは、現実的と呼ばれているものにはかならない、ということなのである。というのも、現実的なものとは、他者にたいして存在するということを本質とするものだからである。つまり、存在だからである。それなのに徳の意識は、そのものと存在との区別という、ほんとうは成り立たない区別に依拠している。―徳によれば、世の中が善なるものを転倒させるものであるのは、世の中が個人としてふるまうということの原理としているからである。けれども、個人としてふるまうということは、現実的なものとしてあるということとを成り立たせる原理なのである。というのも、個人としてふるまうのは意識であり、個人としてふるまう意識が、そのものとして存在するものを他者にたいしても存在するようにするからである。世の中は、そのものという移ろわざるものを転倒させる。けれども世の中が実際におこなっているのは、そのものという抽象されたものでしかなく無でしかないものを、もろもろの實在として存在するものへと転倒させ転換するということなのである。

それなので世の中は、徳が世の中に対抗してつくりあげるものを打ち倒す。世の中は、本質を欠いた抽象を本質とする徳を打ち倒す。けれども世の中が打ち倒すのは実在的なものではない。世の中が打ち倒すのは、区別ならざる区別を創作することであり、人類における最善のものとか、その最善のものがこうむる抑圧とか、善なるもののために払われる犠牲とか、もろもろの素質の悪用とかのことにかんする華美な演説なのである。―そのような観念的な存在や目的はいずれも、ここを熱くさせはするが理性をからっぽのままにしておく空しい言葉、ひとを感動はさせるが何かを築くことにはない空しい言葉であり、そのようなものとして崩れ落ちることになる。そこでくりひろげられる熱弁において確実に語られる内容といえ、以下のことだけである。つまり、人類における最善のものといった高貴な目的のための行動をおこなうということを公言し、人類における最善のものといった素晴らしい決まり文句を口にして個人は、自分を素晴らしい存在だとみなしてい

る、ということだけである。そうした熱弁は、熱弁をふるう自分やその熱弁に耳を傾ける他者のあたまを膨らませるものではあるが、何で膨らませているのかというと、空しい自惚れで膨らませているだけなのだ。―それにたいして古代ギリシアの徳は明確で確実な意義をもつものだった。というのも、古代ギリシアの徳は、ポリス市民という実体において内容豊かな基盤をもち、現実的であり既に存在している善なるものを目的としていたからである。それなので、古代ギリシアの徳は、現実をすみからすみまで転倒したものととはみなし、それに立ち向かい、世の中に立ち向かうことはおこなわなかった。しかし、ここで考察された徳は、そうした実体から抜け出した、本質を欠いた徳となっている。徳はもはや表象されたもの、もろもろの言葉でしかなく、そこには古代ギリシアの徳がもっていたような内容が欠けている。―世の中との闘いとしておこなわれる演説の空疎さは、演説でくりかえされる決まり文句が何を意味するかが語られなければなくなると、たちまちあらわになる。―それだから、決まり文句は、それが何を意味するのかを語る必要がない周知のものとして前提されているのである。周知のものがどんなものかを語ることを要求したとしても、新たに膨らまされた決まり文句でみだされるか、あるいはそれとも、そうした要求に対抗して、ここを訴えるということなされる。決まり文句が何を意味するものであるかは、ここがこころのなかで語ることなのだ、というのである。つまり、それを口にするのは不可能なのだということが白状されるのである。―演説でくりかえされる決まり文句の空しさは、無意識のしかたにおいてであるとしても、我々の時代の教養あるひとびとに確信されるようになったようである。決まり文句をあふれかえさせることや、そうした決まり文句でもって自分をほめ称えるやりかたが、ひとびとの関心をまったくひきつけなくなっているからである。【328】決まり文句がひとびとを退屈させるだけであるのを見れば、関心の喪失は明らかである。

それゆえ、徳と世の中との対立から結果として生じることになるのは、意識が、そのものとして善なるものが、まだいかなる現実性をもたないものとしてあり、それが現実化されなくてはならないのだ、という表象を、身にまとう価値のない空虚な外套として脱ぎ捨てる、ということである。意識が世の中との闘いにおいて経験したのは、世の中は見えた目ほどには悪いものではな

い、ということである。というのは、世の中の現実とは、現実となった普遍的なものだからである。そうしたことが経験されるとき、個人が個人としてふるまうということを経験することによって善なるものをつくりだすという手段は崩れ去る。というのも、個人が個人としてふるまうということこそが、そのものとして存在するものが現実化するということにほかならないからである。世の中においてくりひろげられる転倒は、善なるものを転倒させることだとみなされなくなる。というのは、善なるものを転倒させることこそは、たんなる目的としてあつた善なるものを現実のものへと転倒し転換することだからである。個人としてふるまうことがひきおこす運動こそが、現実的なものとなった普遍的なものすがたなのである。

しかし、ここで実際におきているのは、そうしたことだけではない。そのものとして存在するものを意識する者にたいして世の中というかたちで対立していたものが、克服され消失するということもここでおきているのである。世の中においては、個人が自分のちからで存在するものとしてあるということは、本質すなわち普遍的なものに対立することとしてあつたし、そのものとして存在するものから分離された現実としてあるかのようにも思われていた。けれども、現実として存在するものが普遍的なものと分かちがたくひとつのものであるということが示されたことによって、さきに、徳をなかりたせているそのものがたんなるひとつの見かたでしかなかったのと同じように、世の中をなりたせている、個人が自分のちからで存在するということもまた【329】、もはや存在しないものであることが示されたのである。世の中で個人としてふるまっている者たちは、確かに、自分は自分のちからで行動するということしかしていない、すなわち自分本位に行動するということしかしていないと思ひ込んでいる。が、個人としてのふるまいは、個人が思い込んでいるよりも善いものなのである。個人がおこなっている行為は、同時に、そのものとして存在する普遍的な行為でもあるのである。個人が自分本位の行動をおこなうとき、個人は自分が何をしているか知らないだけであり、個人が、すべての人間は自分本位の行動をしているのだと断言するとき、そこで主張されているのは、すべての人間は自分がおこなっている行為が何であるかを意識していない、ということではしかない。個人が自分のちからで行動するとき、そこでおこなわれているのは、まだそのもの

としてしか存在できていないものを現実存在するものうちへとまたらすということなのである。それだから、ここでは、自分のちからで存在することがめざそうとする目的が、そのものに対立するものであるかのように思ひ込まれるということは消失している。―そのものに対立しながら自分のちからで存在しようとすることにともなう空虚な抜け目のなさも消失している。自分のちからで行動しながら、人間のふるまいがいかにすみからすみまで自己本位かということを描する見事な解説をおこない、自分の行動の正当化を図る、ということも消失している。徳の側で、そのものという目的が消失し、そのものについての演説が消失したように、消失している。

それゆえ、個人が個人として行為し行動することが、目的そのものとなっている。個人がもろもろの力をふるい、外に表し戯れさせることこそが、もろもろの力に生命(いのち)を吹き込むのであり、もし個人がそれをおこなわなかったならば、もろもろの力は、死んだそのものそのままである。そのものは、実行されることもなく存在することもない抽象的な普遍的なものではない。そのものは、そのもののまま、個人がもろもろの力をふるいながら個人としてふるまう過程の存在なのであり、個人がもろもろの力をふるいながら個人としてふるまう過程の現実なのである。

【330】

C 自分を、そのものとして自分のちからで実在的なものにする個人

自己意識の概念は、最初は自己意識にかんじて我々がもつ概念でしかなかったが、今や自己意識が自己意識としての自分にかんじてもつ概念となっている。すなわちそれは、自分は自分が確信しているように、実在するものすべてである、ということである。自己意識にとって目的や本質であるのは、普遍的なもの―素質や才能―と個人としてふるまうことがみずから運動しながら相互に浸透することである。―そうした目的が実現され相互浸透がなされるといふことをかたちづくるもろもろの個別的な契機は、それらの契機が互いと結びついて統一する前は、これまで考察したようなもろもろの目的として存在する。けれども、それらの目的は、もろもろの抽象でしかないか、それらの抽象を無理につなぎあわせたキメラでしかなく、そうしたもの

はここでは消失している。そうした抽象やキメラは、精神となった自己意識の最初の空疎な形態に属するものなのであり、ころや想像力や演説によって思い込まれたものであるということのうちに、そのほんとうのすがたがあるのであり、自分が実在であることをそれそのものとして自分のちからで確信している理性のうちに、そのほんとうのすがたがあるのである。理性が自分が実在であることをそのものとして自分のちからで確信するとき、理性は、理性を介することなく存在する現実に対立する目的としてある自分を何よりも最初に実現しようとする、ということはやおこなわず、意識の対象としてカテゴリーそのものをもっている。―かつて理性は、自分のちからで自分だけで存在する【331】自己意識である、すなわち、自分でないものをことごとく否定しようとする否定的な自己意識である、という規定のうちにあらわれたが、そうした規定はここでは廃棄されている。かつて自己意識が自分の前に見いだした現実、自分を否定するものであるかのようであり、自己意識はそれを廃棄することをおしてでなければ自分の目的を現実化するとはできなかった。けれども、目的、そのものとして存在するものは、他者にたいして存在するもの、見いだされた現実であるものと同じものであるということが明らかになったことよって、ほんとうのこととして自己意識が見いだすことが、自己意識が確信していることから分離したものであるということではなくなった。―そのさい、立てられた目的が意識が自分について確信していることであり、その目的がどのようにに現実化するかが意識によつてほんとうのこととして見いだされることなのだ、と解してもいい。あるいは、立てられた目的こそが意識がほんとうのこととして見いだすものであり、その目的がどのような現実となるかということが意識の確信することなのだ、と解してもいい。―本質と目的がそのものとして自分のちからで存在するものとしてあるということは、本質と目的とが本質と目的とのまま実在するものとなつていくということが意識に確信されているということなのである。そこでは、そのものとして存在することと自分のちからで存在することが相互に浸透し、普遍的なもの個人としてふるまうことが相互に浸透している。行為は行為自身のみで、ほんとうのものとしてあり現実となっている。行為は、自分が個人としてふるまうていうことをまわりにたいして表明し、あるいは公言するということをおこなっているその

ときに、そこに、目的がそのものとして自分のちからで存在しているのを見るのである。

以上のことが自己意識の概念なのであり、それゆえ、そうした概念を手にとってカテゴリーは、自己意識に對立する規定をもつものとしてあった。カテゴリーへの自己意識のかわりかたで言えば、自己意識がカテゴリーにかかわることは、まず観察というかたちでおこなわれ、そのあと行為というかたちでおこなわれたのだ。自己意識は、カテゴリーが自己意識にたいしてもつそうした規定から離れて、自分のうちに還っている。ここで自己意識が対象とするのは純粋なカテゴリーである。自己意識が、自分についての意識をもつようになったカテゴリーなのである。自己意識のこれまでの形態はすでに清算されており、それらの形態は自己意識の背後に、自己意識に忘れられながら横たわっている【332】。それらの形態は、自己意識の目の前に見いだされる世界として自己意識に對立することはなく、自己意識の内部で、もろもろの透き通った契機となつてみずからを展開する。とはいえ、それらの契機が自己意識に意識されるときは、まだ実体的な統一へのまとまりを欠いた互いに区別された契機のまま運動をくりひろげることになる。それでも自己意識は、それらの契機のうちどの契機のうちにあるときでも、存在と自己との単純な統一を手放すことはない。存在と自己との単純な統一は、それらの契機の類なのである。

このとき自己意識は自己意識がおこなう行為につきまとう対立や制限を、すべて投げ捨てている。意識ははつらつと自分の内から外に出るが、向かう先は他者ではなく自分自身である。個人としてふるまうということが、行為が現実のものであるということにほかならないのだから、行為が働きかける素材も、行為が目指す目的も、行為そのまゝの行為なのである。それなので行為は、自由に虚空をさまようように自分自身のうちを動き回り、妨げられることなく、あるときは広がり、あるときは狭まりながら、完全に満たされたまま、自分自身の内でのみ自分自身とのみ戯れる、というような円環運動をおこなっているという外見を呈する。個人としてふるまうことが形態をまとうということが可能とされる元素は、そうした形態を純粋にただ受け入れてくれるものという意味をもつものとしてある。この元素は昼間の光な

のであり、行為がおこなうのは、その光に自分をさらし、自分が何ものであるかを明かそうとすることなのである。行為は何ものも変えることはないし、何ものにも立ち向かうことはない。行為は、見えなかったものを見えるものにするということがなされる形式なのである。昼間の光にさらされてあらわれる内容は、行為がそのものとして既にそれであるところのものにほかならない。行為がそのものとして存在しているということが、思惟された統一としての行為の形式なのであり、行為が現実的なものとしてあるということが、存在する統一としての行為の形式なのである【333】。行為がそうした形式をみたま内容は、行為がただ単純に行為として存在するという規定のもとにのみあるのであり、行為が移行や運動をひきおこすものとしてあるという規定とは反対のところにあるのである。

a 精神的な動物の国と欺瞞、あるいは事そのもの

個人としてふるまう個人は、そのものとして実在的なものとして存在しているが、最初にあらわれるのは再び、個別的で規定された個人である。それだから、個人は自分が絶対的に実在的なものであることを知っているとはいえず、個人の実在性は抽象的で普遍的なものなのであり、個人も自分の実在性をそのように意識している。その実在性は、中身と内容を欠いた実在性である。つまり、これこれのカテゴリーというような空疎な観念でしかないのである。——ここでこれから見なければならぬのは、それそのものとして実在的なものとしてある個人のそうした概念がその概念をかたちづくるものもその契機において自分をどのように規定するか、ということであり、個人が自分自身についても持っている概念が、個人の意識のうちでどのようなものとしてあらわれるか、ということである。

個人は個人として自分のちからで、すべての実在するものとなっている、ということが、個人概念であるわけだが、この概念は最初は結果なのである。個人は自分がどのような運動をくりひろげ、それがどのような現実となるかということ、まだ示していない。ここでは個人は、そうした運動を介することなく、単純にそのものであるものとして立てられている。否定性とは、運動としてあらわれるものと同じものであるわけだが、単純なそのもの

が否定性をおびるとき、単純なそのものは規定されたありかたをするものとなるのであり、存在、つまり単純なそのものは、規定された大きさをもつものとなる。【334】そのようなようにして個人は、根源的な規定された本性をもつものとして姿をあらわす。その本性が根源的な本性であるのは、本性がそのものとして存在するものだからである。その本性が根源的に規定されたものであるのは、そのものが否定的なものをかかえこんでいるからである。そして、そのものは、否定的なものをかかえこむことによって、質をもつものとなるのである。けれども、存在がそのような制限されたものとしてあるということには、意識がおこなう行為を制限することはできない。というのは、意識がおこなう行為においては、自分を自分自身に結びつけるということが完璧におこなわれているからである。他者への結びつきがあれば、そうした結びつきは意識のおこなう行為を制限するものとなるだろうだが、他者への結びつきがここでは廃棄されているのである。それだから、本性が根源的に規定されたものとしてあるということとは、ここでは、単純な原理でしかない。根源的に規定されたものとしてある本性は、透明な普遍的な元素なのであり、その元素のうちで個人は自由であり続け、自分自身と等しいものであり続けながら、自分もつものものの区別をその元素のうちで妨げられることなく展開するのである。そこでは、個人が自分を現実化するさいになされるのは、個人が純粋に自分とのあいだで相互作用をくりひろげることなのである。それは、動物の無規定な生命がおこなうことと似ている。つまり、動物の無規定な生命は、水とか空気とか大地といった元素に、そしてそれらの元素の内部でさらに細かく規定されたものもその原理に、生命の息吹を吹きこみ、自分もつ契機のすべてをそれらの元素や原理に浸すのだけれども、それらの契機を、二元素から受ける制約をもともせず、自分の力のうちに保ち、自分をひとつのものに保っているのであり、そして、ひとつの特殊な有機体でありながら、同一の普遍的な動物的生命であり続けているのである。

意識は規定された根源的な本性のうちで自由であり続け、全体であり続けているのだが、その規定された根源的な本性が、個人にとって目的であるものの内容としてあらわれる。それは、個人がおこなう運動を介していないものであるが、個人にとってはそれが目的であるものの唯一の内容なのであ

り、内容と呼べるものはそれしかないのである。それは確かに規定された内容なのだが、そもそもそれが内容であるのは、学的な立場にいる我々が、そのものとしてあるものを孤立させて考察する限りでしかなくない。【335】ほんとうは、それは、個人のふるまいが浸透した実在なのである。つまり、個別的なものとしての意識が自分自身の現実としてもつ現実なのである。この現実が、最初は、存在するものとして立てられており、行為するものとしてはまだ立てられていない。しかし、行為にとつては、一方では、内容がそうした規定されたものとしてあるということは、意識が超えることを望む制限とはなっていない。というのは、内容がもつ規定は、存在する質として見るならば、意識が運動をくりひろげる場としてある元素がもつ単純な色だからである。けれども、他方では、否定性が規定性であるのは、否定性が存在における否定性だからなのである。しかし、行為とは、否定性にほかならず、否定をおこなうものとしてあるということにほかならないのである。それゆえ、行為する個人において規定性は、分解されながら、ことごとく否定されてゆくのである。あるいは、分解されながらすべての規定性が総括されるのだ、と言ってもいい。

行為がなされ、その行為が意識されるとき、単純な根源的な本性は、行為することにもなう区別のうちに入り込むことになる。行為は、最初に、対象として存在する。確かに、意識に帰属する対象のただけでも、対象として存在する。つまり目的として存在し、それとともに、目の前にある現実と対立したものとなる。行為における他の契機となるのは、静止したものとして表象される目的がおこなう運動である。目的の現実化である。つまり、目的を、完全に形式的なものとしてある現実へと結びつけることである。それには、目的が現実へと移行することの表象がともない、あるいは、移行するための手段がともなう。第三の契機は、ようやく、以下のような対象である。つまり、行為するものが、行為を介さないまま、自分のものとして意識している目的ではもはやないような対象である。それは、行為するものから外に出て、行為するものに対して他者として存在するようになった対象である。これらが行為の互いに異なる側面となるわけだが、【336】領域の概念にもとづき、以下のことは確認しておかなければならない。それは、それらの側面のどれにおいても内容は同一のままであり、いかなる区別もそこに入り

込むことはないということである。つまり、個人と存在とが区別されたものとしてあるということもないし、根源的な本性としてある個人に対して目的が区別されたものとしてあるということもないし、目の前にある現実に対して目的が区別されたものとしてあるということもないし、絶対的な目的としてある現実に対して手段が区別されたものとしてあるということもないし、もたらされた現実が、目的、あるいは根源的な本性、あるいは手段に対して区別されたものとしてあるということもないということである。

というわけで、最初は、個人の根源的に規定された本性、つまり、個人の本質そのままのものとしてあるものは、まだ、行為するものとしては立てられておらず、特殊な能力とか才能とか性格と呼ばれるものとなっている。精神がおびるそれらの風変わりな色合いが、目的の唯一の内容と見なされなければならず、ただそれだけが実在と見なされなければならないのである。もし意識を、そうした根源的な本性を踏み越えて、他の内容を現実にもたらそうとしているものとして表象するならば、そこで表象されているのは、無のなかで無をつくり出そうとしている意識なのである。―が、この根源的な本質は、たんに目的の内容であるにとどまるものではない。それは、そのものとして現実でもあるのである。それは、ふつう、行為のための与えられた素材としてあらわれるものであり、行為において形成されるべきものとして目の前に見いだされる現実としてあらわれるものである。つまり、行為においてなされるのは、まだ表現されていないものとしてあるという形式のうちにあるものを、表現されたものとしてあるという形式のうちへと純粹に移すことだけなのである。意識に対立する現実がそのものとして存在するということが、ただの空虚な見かけになり下がっているのである。【337】それだから、この意識は、行為しようという気になったときも、目の前に存在する現実の見かけによって惑わされることはない。同様に、この意識がおこなわなければならないのは、もろもろの空疎な観念や目的のなかをさ迷うことやめて、自分の本質の根源的な内容へと集中することなのである。―そうした根源的な内容は、確かに、意識がそれを現実化することによってしか、意識に対して存在するようにならないものではあるけれども、しかし、意識にとって意識の内部にしか存在しないものと、意識の外にそのものとして存在する現実とのあいだの区別は崩れ去っているのである。―ただ、その

ものとして存在するものが、意識に対して存在するようになるためには、意識は行為しなければならぬ。すなわち、行為とは、精神が意識として生成し、意識になるといふことなのである。それゆえ、意識が自分そのものとして何であるかを知るのには、意識の現実からなのである。それだから、個人は、行為をとおして自分を現実へとともたらず前は、自分が何であるかを知ることができないのである。——こう書くと、個人は、行為の前には、自分のおこなう行為の目的を決定することができないかのようだけれども、同時に個人は、意識であることによって、行為を完全に自分のものとして、つまり、目的として思い浮かべないわけにゆかないのである。それだから、行為へ向かいつつある個人は、円環のうちに存在しているかのように見える。その円環においては、あらゆる契機は他の契機を前提としており、どこにも起点が見いだせないかのように見える。というのは、個人が、自分の目的でなければならぬ自分の根源的な本質が何であるかを知るのには、なされた行為からなのだが、行為がなされるためには、前もって目的をもっていなければならぬからである。しかし、それだからこそ、個人は、先行するものを介することなく行為を始めなければならないのであり、どのような状況のもとでも、**【338】**何が始まりであり、手段であり、終わりであるかといったことを思い煩うことなく、行為へ向かって歩み始めなければならないのである。というのは、個人の本質であり、そのものとして存在する本性であるものは、一なるものうちにあるすべてなのであり、それが始まりであり、手段であり、終わりだからである。しかるべき状況のもとで行為がなされるべき、始まりとして存在するのは、そのものとして存在する本性である。個人があるものに関心を向けるとき、ここで行為がなされるべきか否か、いかなる行為がなされるべきかといった問いへの答えはずでに与えられているのである。というのは、目の前に存在する現実であるかのように見えるものは、そのものとしては、個人の根源的な本性なのであり、その本性が存在している見かけをまもっているにすぎないものだからである。そうした見かけは、自分を分裂させるものとしてあるという行為の概念のうちに含まれているものなのだが、現実が個人に関心が向かうものとしてあらわれるとき、現実が個人の根源的な本性がまとう見かけであることが、あらわになる。——いかに行為するか、つまり、何を手段とするか、ということも同様に、そのものと

して自分のちからで決まる。才能もまた、個人における根源的なものの規定されたありかたにはかならないものであるが、個人における根源的なものが、目的が現実となるための内的な手段と見なされ、目的が現実へと移行するためのとおり道と見なされるべきとき、それが才能と呼ばれるのである。しかし、手段は現実的なものとしても存在するし、移行するためのとおり道も実在的なものとしても存在する。そのときそれは、才能と、事の本性とが統一されたものとなる。ただし、事の本性は、いま見たように、関心のうちに存在するものとしてある。才能は、手段における、行為の側面をあらわし、事の本性は、行為における、内容の側面をあらわしている。どちらの側面も、存在と行為との相互浸透としてある個人そのものなのである。というわけで、最初に存在するのは、目の前にみいだされる状況である。それは、そのものとしては、個人の根源的な本性なのである。その次に、関心が、その状況を自分のものであるものとして立てる。つまり目的として立てる。そしておしまいに手段において、そのふたつのものが結合され、ふたつのものあいだの対立が廃棄されるのである。が、その結合は**【339】**なお意識の内部に属するものとしてあり、ここで考察されている全体なるものは、対立のひとつの側面となつていて、が、そうした対立は見かけでしかないものであり、まだ残っているそうした見かけが、移行がなされるためのおり道そのものによって、つまり手段によって廃棄されることになる。——というのは、手段は外的なものとの内的なものとの統一であり、手段が内的な手段としてもつている規定性とは反対のものだからである。それだから手段は、そうした規定性を廃棄するのであり、行為と存在との統一である自分を同時に、外的なものとしても立てるのであり、現実的なものとなった個人そのものとしても立てるのである。つまり、個人が、個人自身にたいして、存在する物として立てられるのである。以上のようにして、行為の全体が、状況としても、目的としても、手段としても、仕事としても、自分の外に出ることがないものとなるのである。

しかし、なされた仕事とともに、もろもろの根源的な本性のあいだの区別が姿をあらわしたかのようである。なされた仕事は、仕事が表示する根源的な本性と同じように、ひとつの規定されたものとして存在する。というのは、否定性が行為の手を放れて自由になり、存在する現実となるとき、否定性は、

なされた仕事をもつ質となるからである。けれども意識は、なされた仕事とは反対の規定を自分に与えている。つまり意識は、すべてのものを否定しようとするものであるという規定性を、つまり、行為するものであるという規定性をそなえたものとしてあるのである。それだから意識は、なされた仕事に質という規定性のうちにとどまり続けるのとは反対に普遍的なものとしてあり、それだから、なされた仕事を別の仕事と比較することができるのであり、さらには、なされた仕事を比較することによって、もろもろの個人を互いに異なるものとして理解することさえできるのである。たとえば、より大きな影響力をもつ仕事をした個人を、意思のエネルギーがより強いものとして、あるいは、より豊かな本性をもつものとして、つまり、根源的な規定性による制約がより少ないものとして理解し、そうではないものを、より弱くて【340】みずばらしい本性をもつものとして理解することさえできるのである。量にもとづくこうした非本質的な区別とは反対に、善と悪は、絶対的な区別を表現するものとしてあるのだから、ここではそうした、善悪にもとづく区別はおこなわれない。あれやこれやの受け取りかたをされるものがあつたとしても、いずれも等しく、個人がおこなつた行為であり行動なのであり、個人がおこなつた自己表現であり自己表明なのであり、それゆえ、すべて善なのである。もともと、悪とされるものについて語るといふことがありえないことなのである。悪しき仕事と呼ばれるものがあるとしても、それは、個人によって営まれる、規定された本性の生なのであり、悪しき仕事とは、その規定された本性が自分を現実化したものなのである。生が悪しき仕事となるとすれば、それは、比較をおこなう観念によって生が落としこめられることによつてでしかない。けれども、そうした観念は空虚なものである。なぜなら、仕事とは個人がおこなう自己表明であるという仕事の本質を踏み越えて、仕事のうちに、何が何だかわからない他のものを捜し求めるものであるからである。――比較をおこなう観念におこなえることがあるとしたら、それは、さきほど述べた区別にかかわろうとすることだけである。けれども、さきほど述べた区別をそのものとして見れば、量の区別であり、非本質的な区別なのである。その区別が非本質的であるのは、互いに比較されることになるのは、さまざまの仕事であり個人であるわけだが、それらのものは互いと何のかかわりももたないものであり、いずれも自

分自身とだけ結びついているからにはかならない。根源的な本性だけが、そのものであり、つまり、仕事を評価するさいの尺度として根底におくことができるものなのである。逆に、仕事を評価尺度としながら、根源的な本性を評価することもできる。けれども、根源的な本性と仕事というふたつは、完全に互いに対応するものとしてある。個人に対して存在するものは、ことごとく、個人によつて存在するものなのである。現実であるものは、ことごとく、個人の本性であり個人の【341】おこなう行為なのである。個人がおこなう行為であり個人のそのものであるものは、ことごとく、現実的なものなのである。そして、比較されなければならないものとしてあるのは、それらの契機だけなのである。

したがって、高揚もまるで起こらないし、悲嘆もまるで起こらないし、悔恨もまるで起こらない。というのは、そうしたことのすべては、個人の根源的な本性や、そうした本性が現実において実現されたものとは異なる、別の内容、別のそのものを空想する観念に由来するものだからである。個人がどのようなことをおこない、個人の身にどのようなことがふりかかろうと、それは個人がおこなつたことなのであり、それが個人自身なのである。個人にできるのは、自分自身を可能性という夜から、存在という昼間へと移動させるということがおきているのを、つまり、抽象的なそのものを、現実的な存在という意味をもつものへと移動させるということがおきているのを意識するということだけなのであり、昼に意識にあらわれるものは、夜に眠つていたものにほかならないということを確認することだけなのである。そうした統一を意識するということも、確かに、比較するということではある。けれども、比較されるものたちは、対立という見かけをまもつてにすぎない。比較は見かけの上での形式でしかないものであり、そうした見かけは、個人は個人のまま現実であるということが理性の自己意識となるとき、もはや見かけ以上のものではなくなる。それだから個人にできるのは、自分を楽しむという体験をすることだけなのである。なぜなら、個人は、自分が自分の現実のうちに見いだすことができるのは、現実と自分との統一だけであるということを知り、つまり、自分がほんとうのこととして見いだすことうちにあるのは、自分が自分自身について確信していることだけであるということを知っているからであり、それゆえ、自分は常に自分の目的を達成しているとい

うことを知っているからである。

【342】以上が、自分が個人と存在との絶対的な浸透であることを確信している意識が、自分についても持っている概念である。我々がこれから見ると、この概念が経験をとおして意識に確証されることになるかどうか、そして、実在的なものとしての意識が、その概念と一致するかどうか、ということである。仕事とは、意識が自分に与えた実在性である。個人がそのものとして何であるかが個人に自覚されるようになるのは、なされた仕事においてである。そしてそのようにして、なされた仕事において個人が意識の対象となるとき、その意識は、特殊な意識ではなく、普遍的な意識である。仕事のさなかで意識は、自分を、普遍性という元素のうちへと、存在の無規定な空間のうちへと送り出した。そこから自分のうちへと還るとき意識は、実際には、意識がなした仕事の規定されたものとしてあるのとは反対に、普遍的なものとなっている。なぜならば、意識は、あらゆるものを否定する絶対的な否定性となっている、つまり、あらゆるものと対立しながら行為するものとなっているからである。それゆえ意識は、なされた仕事としてある自分を超えたところにいるのであり、意識自身が、意識のなした仕事によつては満たされない無規定な空間となっているのである。さきほど、概念のうちでは個人と存在との統一が保たれていると書いたが、そうした統一が生じていたのは、なされた仕事、存在する仕事としては廃棄されていたことによるのである。けれども、仕事は存在すべきものとしてあるのであり、我々がこれから見なければならぬのは、個人が、存在する仕事のうちにあるが、仕事の普遍性をどのようにして保つか、そして、その個人がどのようにして自分を満足させるべく手に入れるか、ということなのである。―が、まず最初に我々がおこなわなければならないのは、生成した仕事をそれだけで考察することである。なされた仕事は、個人の本性のすべてを受け入れている。それだから、なされた仕事が存在するということが、すべての区別が互いと浸透し【343】解消されるような行為がなされていることなのである。それだから、なされた仕事は、なされた仕事のまま放り出される時、そこで実際におきるのは、根源的な本性の規定性が、もろもろ他の規定された本性と張り合いながら、それに食い込み、同じように後者も前者に食い込むということであり、そしてそのようにして、根源的な本性

の規定性が、何もかもを飲み込むようにした普遍的な運動のさなかで、消失する契機となり失われてゆく、ということなのである。それそのものとして自分のちからで実在的なものとしてある個人という概念の内部においては、その概念をかたちづくるすべての契機、すなわち、状況、目的、手段、現実化といった契機は、互いに等しいものとしてあり、根源的な本性は、それらの契機をなりたせる普遍的な元素以上の意味をもつものではない。それらに対して、その元素が対象的な存在となる時、なされた仕事のうちで、元素の規定性が規定性として明るみに出ることになるが、元素の規定性がそのほんとうのありかたを手に入れるのは、それが分解するときなのである。この分解は、より詳しくは、以下のようにあらわれる。個人にとつて自分がひとりの現実的な個人となるのは、個人がそうした規定性のうちにいるからであるわけだが、その規定性は現実がもつ内容であるだけでなく、現実にならざる形式でもある。つまり、現実が現実であるということが、そもそも、自己意識に対立するものであるという規定性をもつということなのである。そうした側面から現実を見れば、現実が、概念のうちから見失われ、目の前に見だされるだけのものとなった、よそよしい現実となる。なされた仕事が存在する、ということとは、なされた仕事は、他の個人に対して存在するものとなる、ということなのであり、他の個人にとつてよそよしい現実としてあるものとなる、ということであり、他の個人も、その現実の代わりとなる自分の現実を立てて、自分のそうした行為をとおして、自分は現実と統一したものとしてあるという意識を自分に与えようとしないうけにゆかない、ということなのである。つまり、他の個人がその根源的な本性によつて【344】仕事に向ける関心は、その仕事をなした人間がもともとその仕事に向けていた関心とは別の関心なのであり、なされた仕事は、他の個人がその仕事に向ける関心によつて、別の仕事へと変えられてしまっているのである。それだから、なされた仕事は、どれもこれも、他のもろもろの力や関心とぶつかることでかき消され、過ぎ去ってゆくものなのであり、そのことによつて、個人がなされた仕事をとおして手に入れようとした実在性は、成し遂げられるどころか、消失してゆくものであることが示されるのである。

それだから、意識には、自分のなした仕事のうちで、行為と存在との対立が生じていることが意識されることになる。その対立は、意識の先行した形

態においては、行為の結果であると同時に始まりでもあったのだが、ここでは、ただ行為の結果である。けれども、この対立は実際には、意識が、そのものとして実在的な個人として行為にとりかかったときにも、同じように、根底に横たわっていたのである。というのは、行為は、規定された根源的な本性を、そのものとして前提しているからであり、成し遂げることが、ただ成し遂げるためだけに純粹におこなわれたときも、その規定された根源的な本性が内容となっていたからである。けれども、行為のためだけになされる純粹な行為は、自己同等的な形式であり、この形式には、根源的な本性の規定性はそぐわないものとしてある。他の場合と同じように、ここでも、根源的な本性と行為というふたつのうちのどちらが概念と呼ばれ、どちらが実在的なものと呼ばれるかは、どちらでもいいこととしてある。根源的な本性が、観念、つまりそのものとしてあり、それが行為に対立して、行為において根源的な本性は初めて実在性を手にするのだ、と言ってもいい。あるいは、根源的な本性は、個人としてある個人の存在であると同様に、なされた仕事としてある個人の存在でもあり、それに対して行為は、絶対的な移行としてあるような、つまり生成としてあるような根源的な概念なのだ、と言ってもいい。概念と実在性とのこうした不一致が自分の本質のうちにあるということとを、【345】意識は自分がなした仕事において経験するのである。それだから、なされた仕事において、意識は自分のほんとうの姿に気づくことになり、そのとき、意識が自分自身についてもっていた空虚な概念は消失するのである。

なされた仕事がかかえるこうした根本矛盾が、自分をそのものとして実在的な個人であると考えている個人のほんとうの姿であるわけなのだが、そうした根本矛盾のうちで、個人のあらゆる側面が、再び、互いに矛盾するものとしてあらわれることになる。つまりこういうことがおきるようになる。行為は、否定的な統一であり、すべての契機を統一のものにつなぎとめるものとしてあるが、そうした行為によって、個人全体の内容が存在のうちへと持ち出される、それが、なされた仕事となる。ところが仕事は、つなぎとめられていたそれらの契機を自由に放つのである。そしてそれらの契機は、それぞれがそれぞれであり続けるということをつかさどる元素にかかる、再びお互いと没交渉なものとなるのである。それなので、概念と実在性が分離して、

目的と、根源的な本質であるものというふたつに分かれる。目的がほんとうの本質をもつものとなるかどうか、あるいは、そのものが目的にされるかどうかは、偶然なのである。同様に、概念と実在性は、現実への移行がなされるとおり道と、目的というふたつに分かれもする。目的を表現している手段が、現実への移行がなされるとおり道として選ばれるかどうかは、偶然なのである。おしまいに、以上の内的な契機が、互いの統一を自分のうちにもつものであるにしろ、そうでないにしろ、それらの契機がいつしよになって個人の行為となるとき、その行為が、現実全体にとつてどういうものであるかは、偶然なのである。間違った規定を与えられた目的とか、間違つて選択された手段であっても、それに味方するかしないかを決めるのは運なのである。

このようにして意識は、自分がなした仕事か、意思することと成し遂げることとの対立、目的と手段との対立、これらの内的なものをひとまとめたものとの対立、目的と手段との対立にまきこまれて見ることになる。【346】そしてそうした対立が、意識の行為が偶然のままにくりひろげるあらゆることを自分のうちへと束ねているものなのである。けれども、ここには、意識の統一、意識の必然性が存在している。必然性という側面が偶然性という側面をおおっているのであり、行為の偶然性にかんする経験とは、たんなる偶然的な経験でしかないのであり、そういうことがたまたま経験されただけのことなのである。行為の必然性とは、目的が現実結びついたものとしてあるということなのであり、目的と現実とがそのようにして統一されているということが行為の概念なのである。行為ということがなされるのは、行為が、そのものとして自分のちからで、現実の本質だからなのである。なされた仕事において、確かに偶然的なことが生じる。意思し成し遂げるということとは反対に、成し遂げられたことは偶然性をともなうものとしてある。そうした経験には、これがほんとうのことだと誰もが認めないわけにゆかないかのようなところがあるけれども、その経験は、目的と現実との統一であるという、行為の概念とは矛盾している。我々がその経験の内容が全体としてどのようなものであるかを考察するならば、経験の内容となっているものは、消失する仕事なのである。なされた仕事ごとく消失するものとしてあるということである。が、消失には、消失なるものままあり続ける

ことはできない。消失するということは現実のことなのであり、なされた仕事という現実と結合したものとしてあるのであり、なされた仕事といっしょに消失するのである。否定的なものとは、肯定的なものの否定であるわけだが、その肯定的なものが没落するとき、否定的なものもいっしょに没落するのである。

消失することが消失するということは、そのものとして実在的である個人の概念そのものに含まれていることなのである。というのは、なされた仕事が消滅するということがおきるところのものは、そして、なされた仕事における消失するものは、そして、経験と呼ばれているものに、個人が自分自身についても概念に対する優越を与えるものであるとされるものは、対象的な現実なのである。けれども、対象的な現実とは【347】ひとつの契機なのであり、ここでの意識においてはもはや、自分のうちからは、ほんとうのものであることがないような契機なのである。ほんとうのことであるのは、対象的な現実と行為とが統一したものであり、ほんとうの仕事であるのは、行為と存在とが統一したもので、意思と成し遂げることが統一したもので、行為と存在とが統一したもので、意識が意識がおこなう行為の根底にあるのであり、そのため、そうした確信に対立する現実とは、意識にとつては、自分にとってしか存在しないものなのである。意識は、自分のうちに還つた自己意識となっており、その自己意識にとつてはあらゆる対立が消失しているのだが、そうした自己意識としてある意識にとつて対立が生じることがあるとしても、その対立はもはや、自分のうちから存在する自己意識が現実と対立するという形式をとることはないのである。したがって、対立が生じ、なされた仕事は否定されるということが生じるとき、そうした対立や否定性は、なされた個々の仕事の個々の内容、あるいは、そのときどきの意識の個々の内容だけでなく、現実そのものにかかわるものとしてあるものであり、現実そのものとかかわるものであるがゆえに、現実によつてのみ、そして現実においてのみ存在するあらゆる対立にかかわり、なされた仕事ごとごとく消失するということにかかわるものとしてあるのである。それなので意識は、そのようにして、過ぎ去つてゆく仕事のうちから自分のうちへと還つてゆくのであり、自分の概念と自分の確信が、存在するものであり、存在を続けるものであることを、行為の偶然性にかんする経験に逆らいながら主張す

るのである。意識は実際に自分の概念を経験しているのである。その概念においては、現実とはひとつの契機でしかないものであり、意識にとつて存在するものでしかないものであり、そのものとして自分のうちから存在するものではないのである。意識は現実が消滅する契機であることを経験している。それなので、現実が意識にとつて意味をもつのは、現実が、すみからすみまでが行為と同一ものとしてあるような存在一般であるからでしかないのである。現実と行為とのそのような統一であるとき、なされた仕事はほんとうのものとなる。それが事そのものなのである。事そのものは、どこまでも事そのものであり続ける。【348】それは、消失することなく持続するものとして経験される。事とは、個人的な行為がおびる偶然性、そうした行為がなされるさいの状況や手段や現実がおびる偶然性のことであり、言い換えれば、偶然性をおびたものとしての個人的な行為、偶然性をおびたものとしての状況や手段や現実が事であるわけだが、そうした事から独立しているものとして経験されるものとして、事そのものがあるのである。

事そのものが、状況や手段や現実といった契機と対立するものとしてあるとすれば、それは、それらの契機が事そのものから孤立して存在するものとされているからでしかない。けれども、事そのものは本質的に、現実と個人との相互浸透としてあるものなのであり、現実と個人との統一なのである。が、事そのものは、そうした統一であるとともに、行為でもある。行為といつても、純粋な行為である。が、事そのものは、そうした純粋な行為であるのと同時に、ひとりの個人がおこなう行為でもあるのである。いまだ個人に属し、現実と対立するものとしてある行為である。そのとき事そのものは、目的として存在することになる。けれども、事そのものは、そうした規定性から、つまり、目的として存在するということから、それと対立する規定性への、つまり、現実として存在するということへの移行でもあるのである。そのようにして最後に、事そのものは、意識に対して存在する現実となる。そのようにして、事そのものが表現する精神的な本質において、以下のごとくなされることになる。つまり、それらの契機のすべてが、自分のうちから存在するものとしては廃棄され、普遍的なものとしてのみ存在するものになる、ということであり、そして、意識が自分自身について確信していることが、意識にとつて対象的な存在となる、つまり、ひとつの事となる、という

ことである。対象的な存在といっても、自己意識から自己意識自身のものとして生みだされた対象なのである。そして、自己意識自身のものであるといっても、それは自己意識にしばらくは自由な本来の対象であることをやめてはいない。—ここでおきているのは、感覚的な確信や知覚においてあらわれた物が、自己意識に対して意味をもつものとしてあらわれている、ということなのだが、そのためには、物が自己意識によって存在させられるものとならなければならなかった。物と事とが区別されるのは、その点においてである。—自己意識は、感覚的な確信や知覚においておこなわれた運動に対応する運動を、事において、巡り歩くことになる。

【349】それだから、事そのものは、個人であることと対象であることとの相互浸透が対象的なものとなったものであり、そこにおいては、自己意識のほんとうの概念が自己意識に対して生成してきている。つまり、自己意識が、自分の実体であるものを意識するに至っているのである。が、それと同時に、ここに存在する自己意識は、自己意識の実体についての、生成したばかりの意識であり、先行するものを何も介さない直接的な意識なのであり、実体は規定されたありかたをすることになる。つまりそこには、精神的な本質が存在しているのだけれども、その精神的な本質が、ほんとうの実在的な実体にはまだ成長していないのである。実体にかんする意識が先行するものを何も介さない直接的な意識であるため、事そのものは、単純な本質という形式をもつことになる。その単純な本質は、普遍的なものとしてあり、それをかたちづくるさまざまな契機を自分のうちに含みながら、それらの契機に帰属するものでもあるもののだが、それが再び、規定された契機としてあるそれらの契機に対して没交渉に、自由に、自分だけで存在するものとなり、そうした自由で単純で抽象的な事そのものとして、つまり、本質として存在しているのである。個人の根源的な規定性をかたちづくるものもの契機、すなわち、個人がもつ事をかたちづくるものもの契機は、個人の目的、手段、行為そのもの、現実であるが、それらの契機は意識にとつて、一方では、事そのものに任せることに見捨て、放棄することができるとような個別的な契機として存在する。しかし他方では、それらの契機のすべては、事そのものを本質ともしている。ただしそのことが意味するのは、事そのものが、それらの契機がもつ抽象的で普遍的なものとしてあり、それ

らの契機のいずれにも見いだされるものとしてあり、それらの契機の述語となることができるものとして存在する、ということではしかない。事そのもの自身はまだ主語ではなく、主語となるのはもろもろの契機のほうである。というのは、もろもろの契機は個別性の側面に属するものとしてあるが、事そのものは自身は【350】ようやく、単純に普遍的であるにすぎないものだからである。事そのものは、それらの契機の類なのである。つまり、それらの契機のすべてのうちに、それらが属する種として見いだされるものでありながら、それらから自由なものでもある、そうした類なのである。

意識が、一方で、事そのものを表現する観念論に至り、他方で、形式的な普遍性としてある事そのものの中にほんとうのものを見るようになるとき、意識は誠実であると言われる。誠実な意識は常に事そのもののみかわる。それだから、事そのものをかたちづくるさまざまな契機のうちを、あるいは、事そのもののさまざまな種のうちをいつまでもさまざま。あるひとつの契機のうちでは事そのものに至らない場合は、あるいは、あるひとつの意味においては事そのものに到らない場合は、他の契機や意味において事そのものを入手するのであり、そのようにして意識は実際に満足を常に手に入れるのである。その満足は、意識の概念にもとづき意識に分配されるはずのものなのである。どのような道をとおっても、意識は事そのものを成し遂げたし、達成したのである。というのは、事そのものは、それらの規定の普遍的な類としてあるものであり、それらの規定の述語だからである。

意識が目的を現実のうちにもたらししていないとしても、意識はその目的を意思しはしたのである。つまり、意識は、目的としての目的を、何もなさない純粋な行為を、事そのものへと変えるのであり、そのようにして意識は「しかし何かはなされたし、おこなわれたのだ」という言葉を口にしたながら、自分を慰めることができるのである。普遍的なものは、否定的なものを、つまり消失するものを自分のうちに含むものとしてあるから、なされた仕事水泡に帰するということもまた、意識にとつては意識がなした行為なのである。意識は他の意識を刺激して、自分がおこなった仕事を水泡に帰させるように仕向けたのであり、自分の現実が消失することにさえ満足を見いだすのである。それは、なぐられたいたずら小僧が【351】自分自身を享受する、つまり、なぐられたことの原因としての自分自身を享受するのといっしょで

ある。あるいは意識が、事そのものを実行しようと試みるのがまったくなく、まったく何もなさなかったのなら、意識はそれを願望しなかったということなのである。意識にとって事そのものは、自分の決意と実在との統一なのである。意識はこう主張する。現実とは自分の願望にほかならないものである、と。―おしまいに、意識の関心を引くことが意識の関与なしに生じたとしても、意識にとつて、そうした現実には、意識によつてもたらされたものではないにもかかわらず、意識がそこに関心を見いだしたということによつて、事そのものなのである。意識の関心を引くものが、意識が個人的に遭遇した幸運であるならば、意識はそれを、自分がおこなったことであり自分の手がらであることとして尊重する。意識の関心を引くものが、意識が個人的に遭遇した幸運ではなく、世界的な出来事であり、意識にとつては、自分が住む世界における出来事であるということ以上のかかわりがないものであるとしても、やはり意識はその出来事を自分の出来事とするのである。出来事に行動をとらぬ関心を抱いたということが、意識にとつては、出来事に賛成する、あるいは反対する党派に加わっているということをし、そして、党派と闘つたり党派の味方をしたりしていることを意味することとしてあるのである。

すでに明らかであるように、この意識の誠実さは、この意識があらゆるところで体験している満足がそうであるように、実際には、意識が、意識が事そのものについていていられるものもろの観念を取りまとめることなく、ばらばらのままにしている、ということにあるのである。意識にとつて、事そのものは、自分の事であると同様に、なされた仕事ではないものである、つまり、行為のためのなされる純粋な行為なのであり、実現されようとすることのない空虚な目的であり、行動がともなわない現実なのである。意識は、それらの意味のひとつひとつを、順番に、事そのものという述語の主語にしてゆきながら、それらの意味を順番に忘れてゆくのである。たんに意思しただけのときは、あるいは、何も願望しなかったときでも、事そのものは、実現されようとすることのない空虚な目的であるという意味はもつし【352】、意思することと成し遂げることとの観念的な統一であるという意味はもつのである。目的は水泡に帰したけれども、意思はされたのであり、あるいは、行為のためになされる純粋な行為はなされたのだと自分を慰める場合

は、それと同様に、他人にしてあげなくてはならない何かはしたのだと自分を満足させる場合は、意識は、行為のためになされる純粋な行為を、あるいは、全く何の役にも立たない仕事を、本質とするのである。その仕事になぜ私が「役に立たない」という形容詞をそえたのかという、いかなる仕事でもないような仕事は、役に立たないものと呼ばれるべきだからである。おしまいに、幸運にも現実が見いだされた場合は、なされた行為をともなわないその存在が、事そのものとされるのである。

けれども、この誠実さのほんとうの姿は、見かけほどは誠実なものではないのである。というのは、この誠実さは、それらのさまざまな契機を互いにばらばらのままにしておくほど無思想であることはできないのであり、それらの契機のあいだに対立があることを、ただちに意識しないわけにゆかないからである。なぜなら、それらの契機は互いとむすびついたものとしてあるからである。行為のためになされる純粋な行為は、ひとりの個人がおこなう行為であり、そうした行為は、個人がそうであるのと同様に、本質的に、ひとつの現実、ひとつの事であるものである。逆に、現実であるものは、本質的に、行為一般であると同時に、ひとりの個人のおこなう行為としてのみ存在するものなのであり、同時に、ひとりの個人のおこなう行為は、行為一般がそうであるように、現実でのみあるものなのである。それだから、ひとりの個人が抽象的な現実としてある事そのものにかかわるとき、そこでなされているのは、ひとりの個人がおこなった行為としてある事にかかわる、ということなのである。けれども、同様に、個人が行為すること、行動することだけにかかわるとき、個人は行為すること、行動することだけをまじめにはおこなっておらず、個人は自分のものとしてある事にかかわっているのである。おしまいに、個人が自分の【353】事にかかわることだけを意思し、自分が行為することだけを意思しているかのようなときでも、個人は再び、事一般に、つまり、そのものとして自分の力で持続する現実にかかわっているのである。

事そのものとそれをかたちづくるものもろの契機は、ここでは内容としてあらわれているが、それらの契機が意識におけるものもろの形式としてあらわれることも同じく必然的なことである。事そのものをかたちづくるものもろの契機は、内容としてあらわれても、たちまち消失するのであり、いずれ

の契機も、それと入れ替わりにあらわれる他の契機に席を譲る。それなので、それらの契機が存在するのは、廃棄されたものとしてある、という規定性のうちにあるものとしてであることにならないわけにゆかないのであり、そしてそのようにしてそれらの契機は意識自身のもろもろの側面となるのである。事そのものは、そのものであるものとして、つまり、意識が自分のうちへ折れ曲がり自分のうちに還ることとして存在する。事そのものをかたちづくるもろもろの契機は互いを押しつけるものとして存在するが、そのことが意識においてどのように表現されるかという点、もろもろの契機が、意識において、そのものとして存在するものではなく、他のものに対して存在するものとして立てられる、というふうにしてである。内容をかたちづくるもろもろの契機のひとつが、意識によって明るみに置かれ、他の契機に対してあるものとして表象される。けれども意識は、意識によって明るみ置かれた契機から出て、自分のうちへ折れ曲がり自分のうちに還っているのであり、意識が明るみに置いた契機に対立するものも、意識のうちに存在しているのである。意識はその対立するものを、自分のものとして自分の手もとに保管するのである。そしてそれと同時に、もろもろの契機のどれかひとつが意識によって外に差し出され、他の契機が意識の内なるところに保管されるというだけではなくて、意識はそれらの契機を交替させもするのである。というのは、意識は、それらの契機の一方をも他方をも、自分にとって本質的であるものにしたたり、他の意識にとって本質的であるものにしたたりするということをしなければならぬからである。全体とは、個人と普遍的なものとの相互浸透がくりひろげる運動のことである。ところが、その全体が意識にとっては単純な本質としてしか存在せず、したがって、事そのものという抽象としてしか存在していないのである。そのため、全体をかたちづくるもろもろの契機が【354】事そのものの外へと分離しながら、互いとも分離することになる。全体が全体として汲みつくされ、全体が全体として表現されるためには、ある契機を外に差し出すということと、その契機を自分の手もとに保管するということを分離しながら交替させるほかないのである。そうした交替をおこないながら意識が、ひとつの契機を自分のためのものとし、そしてその契機を、自分が自分のうちに折れ曲がり自分のうちに還るということにおける本質的なものとしながら、他方で、他の契機を、自分が自分の表面にま

っているのではないもの、つまり、他の意識に対して存在するのではないものとするとき、そこに、もろもろの個人が互いとくりひろげる戯れが姿をあらわすことになる。その戯れにおいて個人が目にするのは、自分たちの誰も彼もが相手を騙しながら相手に騙されているという光景である。

それだから、次のようなことがおきることになる。まず個人があることを実現しようとする。それによって個人は、あることを事そのものにしたかのようである。個人は行為する。が、そのとき個人は他のもろもろの個人に対して存在するものとなり、個人は現実とかかわりをもつことになったかのようである。それだから、他のもろもろの個人は、その個人の行為を、事そのものへの関心からなされた行為と受け取り、事をそのものとして実現するという目的のための行為として受け取り、事をそのものとして実現することが、最初の個人であるその個人によってなされるのか、それとも他のもろもろの個人によってなされるのかは、どうでもいいことであると受け取る。そのため、他のもろもろの個人は、その事が、既に他のもろもろの個人によって実現されていることを指摘するか、あるいは、それが他のもろもろの個人によってはまだ実現されていない場合は、個人に助力を申し出て、それを実行に移すのだけれども、そのとき個人の意識は、他のもろもろの個人が個人の意識の在り処と思いついているところとは別のところにあるのである。つまり、事に取り組むにさいして個人の関心をひいているのは、その個人が自分の行為をおこない、自分の行動をする、ということなのである。それだから、他のもろもろの個人が、その個人が自分の行為をおこない、自分の行動をするということが、その個人の事そのものだったのだ、ということに気づくとき、彼らは自分たちが錯覚させられていたのを見いだすのである。—けれども、実際には、他のもろもろの個人が助力のために駆けつけたということそのことが、彼らが見ようとしたもの、示そうとしたものが、事そのものではなくて、彼ら自身の行為だった、ということにほかならないのである。つまり、彼らは騙された【355】苦情を言っているけれども、その彼らもまた、彼らが騙されたのと同じしかたで、他のものたちを騙そうとした、ということなのである。—このようにして、この個人にとっては、自分の行為をおこなうこと、自分の行動をすること、自分のもつもろもろの力を戯れさせることが事そのものなのだ、ということがあらわになると、こ

の個人の意識は、他のもろもろの意識のためではなく、自分のために行動しているかのようであり、この個人の意識が気にかける行為とは、自分がおこなう行為としてある行為だけであって、他のもろもろの意識がおこなう行為としてある行為ではないのであり、したがって、この個人の意識が自分の事を自分の好きにしているように、他のもろもろの意識にも彼らの事を彼らの好きにさせているかのように見えてくる。けれども、そのように見えたとき、他のもろもろの意識は再び思い違いをしているのである。この個人の意識は、他のもろもろの意識がこの個人の意識の在り処だと思込んだところは、既に別のところにいるのである。この個人の意識がかかっているのは、この個人の意識の個別的な事としてある事ではなく、事としてある事、つまり、すべての意識のために存在する普遍的なものとしての事なのである。それだから、この個人の意識は、他のもろもろの意識がおこなう行為や仕事に口出しするのである。もし他のもろもろの意識がおこなう行為や仕事を彼らの手から奪い取ることができないならば、この個人の意識は、他のもろもろの意識がおこなう行為や仕事を評価し、そのことによって、自分がおこなうべきをつくりだし、そのことによって、自分の関心が他のもろもろの意識がおこなう行為や仕事に向かうようにする、ということせめておこなうのである。けれども、この個人の意識が他のもろもろの意識がおこなう行為や仕事に、自分が是認したもの、自分が賞賛したものという刻印を押すとき、それは、他のもろもろの意識がおこなった仕事かそうした仕事としてあることを損なわなかっただけでなく、自分がおこなった批判によってそれを損うこともなかったという自分自身の寛大さと節度とを賞賛するつもりでなされているのである。この個人の意識は、他のもろもろの意識がおこなう仕事に関心を向けながら、その仕事のうちで自分自身を享受しているのである。同様に、この個人の意識が、他のもろもろの個人がなした仕事を非難するときも、非難は、その個人の意識にとつて、自分自身の行為を享受するということをもたらしてくれるものとしてあるのであり、そのため、その個人の意識はその仕事を歓迎するのである。しかし、この個人の意識がおこなうそうした口出しによって欺かれたと考えたものたち、そしてそう証言したものたち自身も、自分も同じようにしてひとを欺こうとしたのである。彼らは彼らのなす行為と行動は、彼ら自身のためのものであり、彼らが【356】彼ら自

身のことだけを意図し、彼ら自身の本質のことだけを意図するためのものであると証言する。けれども、彼らが何らかの行為をおこない、それによって自分を表現し、自分を明るみにさらすとき、彼らが、明るみを締め出し、普遍的なものを締め出し、あらゆるものたちの参加を閉め出すことが自分たちの意思だと申し立てるならば、彼らは自分たちのおこなっている行為とただちに矛盾することになる。現実化するということは、自分ものを普遍的な元素のうちへと差し出すことなのである。そしてそのことによって、自分ものがすべてのひとびとの事となるのであり、そうならなければならないのである。

それだから、純粋なことだけにかかっているとと言われるとき、それは、そう言っている本人を欺き、他のものたちをも欺くことになるのである。意識がひとつの事を提供するとき経験するのは、他のものたちが、テーブルに出されたばかりの牛乳にたかるハエのように駆けつけてきて、それが自分たちにもかかわりがあるものであることを知りたがるということである。そして彼らは、ひとつの事を提供した意識も、彼らと同じように、対象としてある事にかかっているのではなく、自分のものとしてある事にかかっているのだ、ということを知りたがるのである。それとは反対に、個人がおこなう行為そのもの、個人がもつ力や能力を行使すること、個人が自分が何であるかを表明することが本質的なことであるのだとされるとき、同じように、経験されることが入れ替わるのである。つまり、すべてのひとびとが感動させられていて、自分が招待されていると受け取っているのであり、純粋な行為の代わりに、つまり、個人のものでしかない個別的な行為の代わりに、すべてのひとびとのためのものでもあるような何かを提供されている、ということが経験されるのである。どちらの場合も、生じているのは同一のことである。生じていることが、受け取られ想定されている意味とは異なる意味をもつものとしてあるということだけが生じているのである。意識が経験しているのは、事や行為がもつ二つの側面が等しく本質的な【357】契機としてあるということであり、そしてそれが、事そのものの本性であるものなのである。すなわち、事そのものは、行為一般や個別的な行為に對置されたものとしての事でもないし、存在に對置されたものとしての行為でもないのであり、行為や存在といったそれらの契機を種としてもちながら、その種から

自由な類であるようなものでもないのである。事そのものは、ひとりひとりの個人およびすべての個人がおこなう行為がその存在であるような本質なのである。そして、なされた行為がそのままにすべてのひとびとのための行為であるような本質なのであり、ひとりの事であるとしても、すべてのひとびとの行為、あらゆるひとびとの行為であるような事としてある本質なのである。すべての本質の本質、つまり、精神的な本質であるような本質なのである。意識が経験するのは、それらの契機のいずれも主語ではなく、それらの契機は、普遍的なものとしてある事そのものうちで解消するものとしてある、ということである。無思想な意識にとっては、個人をかたちづくるものもろの契機が、ひとつずつ主語となつて存在するが、それらの契機が、単純に個人としてある個人のうちでひとつにまとまるとき、その単純に個人である個人は、ひとりの個人ありながら、そのままに、普遍的なものとなる。そのことをおして事そのものは、主語に添えられる述語であることをやめ、生命を欠いた抽象的な普遍性という規定性を失う。事そのものは、個人によつて浸透された実体となる。つまり主体となる。ここでは、個人は個人そのものとしても存在する。つまり、ひとりの個人であると同時にすべての個人でもあるものとして存在する。事そのものは普遍的なものであるが、その普遍的なものは、すべてのひとびとのおこなう行為、あらゆるひとびとのおこなう行為としてのみ存在となる。事そのものはひとつの現実であるが、そうであるのは、意識が事そのものが自分の個別的な現実であると同時に、すべてのひとびとの現実であるということを知っているということによる。純粹な事そのものは、まさにカテゴリーとして規定されたものごとである。つまり、自我である存在、存在である自我である。けれども、カテゴリーとして規定されたものは、思惟として存在したのであり、思惟は、現実的な【358】自己意識からは区別されたものとしてあった。現実的な自己意識をかたちづくるものもろの契機は、我々がそれらを自己意識の内容と呼ぶ限りでは、目的と行為と手段であり、同様に、我々がそれらを自己意識の形式と呼ぶ限りでは、自分のちからで存在することと、他に對して存在することであるのだが、それらの契機がここでは、単純なカテゴリーそのものとひとつのものとして立てられているのであり、そしてそのことによつて単純なカテゴリーは同時に、すべての内容であるものとなるのである。

b 法則を立てる理性

精神的な本質を単純な存在として見れば、それは純粹な意識であり、ひとつの自己意識である。個人の規定された本性は、その肯定的な意味、つまり、そのものとして、個人がおこなった行為の元素であり目的であるという意味を失っており、ただの廃棄された契機になっている。個人はひとつの自己なのだ、その自己は普遍的な自己として存在する。反對に、精神的な本質である事そのものを形式として見れば、それは、行為する個人が自分のうちにつくりだす区別を内容とする形式であることになる。というのは、個人が自分のうちにつくりだすそれらの区別が、事そのものという普遍的なものの内容をかたちづくるものだからである。カテゴリーは、そのものとして存在するものである。つまり、純粹な意識の普遍的なものとして存在する。が、カテゴリーは、そのものとして存在するものであるのと同様に、自分のちからで存在するものでもある。というのは、意識の自己も、意識の普遍的なものがあるのと同様に、カテゴリーをなりたせる契機となっているからである。カテゴリーは絶対的な存在である。というのは、カテゴリーが普遍的なものとして存在するということは、カテゴリーが単純に自己同一的なものとして存在するということからである。

それだから、意識にとつて対象であるものは、ほんとうのものであるという意味をもつものとして存在する。意識にとつて対象であるものが、存在するものとしてあり、意識に對して存在するものであるのは【359】、それがそのものとして自分のちからで存在するものであり、そのものとして自分のちからで意識に對して存在するものとしてあるという意味においてである。意識とつて対象であるものは、絶対的な事であり、それは、意識が確信したことと、それがほんとうは何であるかということとの対立、普遍的なものとの個別的なものとの対立、目指された目的と実在となつた目的との対立にさいなまれることがもはやないものとして存在する。自己意識が現実として存在しながら行為するものとしてあるということが、絶対的な事が存在することなのである。それだから、絶対的な事は、人倫的な実体なのである。人倫的な実体を意識するとき、意識は人倫的なものとなる。人倫的な意識の対

象となるのは、人倫的な意識にとってほんとうのものである。というのは、人倫的な意識は、自己意識と存在とを統一し合一しているからである。人倫的な意識は人倫的な意識にとって絶対的なものとして存在する。というのは、自己意識が、自己意識にとって対象であるものを超えるということが、意識にとつて不可能なこととしてあり、意識がそれを意思することがにこととしてあるからである。というのは、意識はその対象のうちにあるが、自分自身のもとにあるからである。なぜ、その対象を超えることが意識にとつて不可能なことであるのかというと、対象であるものが存在するものすべてであり、力のすべてだからである。なぜ意識がその対象を超えることを意思しないのかというと、対象としてあるのは、自己意識の自己であり、その自己のもつ意思だからである。この対象は、対象としては、実在的な対象なのである。というのは、この対象は、意識ものつ区別をそなえたものとしてあるからである。つまりこの対象は、絶対的な本質をかたちづくるものもろの規定された法則のもろもの群れへと自分を分割するのである。けれども、そのもろもの群れが概念を濁らせることはない。というのは、存在、純粹な意識、自己といった契機は概念のうちに閉じ込められ統一されているからであり、そしてその統一が、それらの群れの本質をなすものとしてあり、それらの契機が区別されるときも、それらの契機をはなれなければならぬことはもはやないからである。

人倫的な実体をかたちづくるそうした法則、あるいは、法則のそうした群れは、そうした法則のまま、そうした群れのまま、そのまま承認されている。つまり、それらのものがどのような起源をもつものなのか、どのような正当性をもつものなのか問われることはないし、それらに代わる他のもの【360】が捜し求められることもないのである。というのは、そのものとして自分のちからで存在する本質とは別のものとして存在するものがあるとするれば、それは自己意識自身だけであることになるが、自己意識は、そのものとして自分のちからで存在する本質とは別のものではないからである。つまり、自己意識自身が、そのものとして自分のちからで存在する本質が自分のちからで存在したものであるであり、そして、そのものとして自分のちからで存在する本質が真なるものであるのは、その本質が、そのものである、つまり、純粹な意識であるのと同様に、意識の自己であるからなのである。

自己意識は、自分が、人倫的な実体が自分のちからで存在するという契機であることを知っているのであり、そのため、自己意識が、もろもの法則は自分のうちに存在するものであるということを表示するとき、その表示は、健全な理性ならば、何が正義であり何が善であるかを知っている、といった語り口でなされることになる。健全な理性がそれを知っているのが、起源や正当性についての問いを介することによってではないように、それが健全な理性にとつて価値をもつのも、そうした問いを介することによってではないのである。健全な理性は、そうした問いを介することなく「これは正義であり善である」と言うのである。しかもこの理性が「正義であり善である」と言うのは「これ」なのである。つまり、もろもの規定された法則が存在している、「これ」は、そうした規定された法則によって満たされた、内容豊かな事そのものであるわけなのである。

そのようにして、起源や正当性を問うことを介さずそのまま存在するものは、同様に、そうした問いを介することなしに受け取られ、考察されなければならぬものとしてある。かつて感覚的な確信が、そうした問いを介することなく、存在するものとして語ったものについて、我々がおこなったのは、それがどのような具合のものであるかを見るということだった。それと同じことが、やはり、そうした問いを介していない人倫的な確信が語る存在についても、つまり、そうした問いを介することがないまま、人倫的な本質をかたちづくるもろもの群れとして存在するものについても、なされなければならぬ。それがどのような具合のものかを見るさいに、人倫的な実体をかたちづくる法則のいくつかが、実例となるだろう。我々がおこなうのは、それらの法則を、それらの法則のことを知っている健全な理性がそれらの法則を表明するさいの形式において受け取るということである。それらの法則は、起源や正当性への問いを介さない人倫的な法則と見なされるものであるとしても、そうした法則に我々がひとつの契機を持ち込み、それらの法則にそれを当てはめると言うことがあつてはならないのである。

「誰もが真実を語るべきである」。―この義務をカントやフイヒテがそうしているように、無制約のものとして表明したとたんに、ただちに【361】「誰もが真実を知っているのならば」という条件が添えられることになる。そこで今度は以下のような命令がなされることになる。「誰もが、そのとき

ときに、真実について自分がもっている知識と確信にしたがって、真実を語るべきである」。健全な理性とは、実体的な意識であり、何が正義で何が善かを、起源や正当性を問うことを介することなく知っている意識であるわけだが、この理性は、最初は命令に条件を添えなかったことについて、以下のように説明するだろう。その条件は最初におこなわれた普遍的な表明に深く結びついたものとしてあったのであり、最初の命令はそのつもりでなされたものだ。と、と。けれども、そうした説明をとともに、この理性は実際には以下のことを白状しているのである。つまり、この理性はむしろ、最初の命令を表明したとき、ただちにその命令を損なっていた、ということである。この理性は「誰もが真実を語るべきである」と語ったのである。ところがこの理性はそれを、「誰もが、真実について自分がもっている知識と確信にしたがって、真実を語るべきである」というつもりで語っていたのである。つまり、この理性は、自分がそのつもりでいることとは別のことを語ったのである。自分がそのつもりでいることとは別のことを語ったのが意味するのは、真実を語っていない、ということである。真実ではないところ、言い回しのへたさを改善するならば、以下のような表現となる。「誰もが、真実について自分がもっているそのときどきの知識と確信にしたがって、真実を語るべきである」。けれども、そう言ってしまうと、命題が言明しようとしていた普遍的に必然的なこと、つまり、そのものとして妥当することが、完全に偶然的なことへと転倒してしまうのである。というのは、真実が語られる、ということが、私が真実を知っているかどうか、その真実に確信をもつことができるかどうか、という偶然に委ねられてしまうからである。そこで言われているのは、真実や虚偽は、ひとりの人間がそれをどのようにに認識し、それをどのようにに思い込み、それをどのようにに把握するかに合わせて、ごちゃ混ぜに語られるものである、ということ以上のことではない。どんな内容が語られるかは偶然なのである。内容の偶然性が普遍性をそなえるのは、【362】偶然性が表現される命題の形式がそうさせているにすぎないのである。けれども、人倫的な命題としてのこの命題がひとに約束するのは、普遍的で必然的な内容なのである。その内容が偶然的なものであるならば、この命題は自分自身と矛盾するのである。―おしまいに、命題が改善されて、「真実についての知識や確信はなくなるべきものであり、真

実は知られるべきものとしてあるのである」と語られたとすれば、この命題は、出発点で語られたことと完全に矛盾した命令となることになる。出発点において、健全な理性は、健全な理性そのまま、真実について語る能力をもっているとしていた。ところがここで言われているのは、健全な理性は真実について知っているべきである、ということなのであり、つまり、健全な理性は、健全な理性のままでは、真実について語るべきでない、ということなのである。―内容の面から考察すると、「ひととは真実を知るべきである」という要求がなされるとき、内容が抜け落ちているのである。というのは、この要求は、知ること一般に結びついたものだからである。それは「ひととは知るべきである」という要求なのである。したがって、要求されているのは、すべての規定された内容から自由であるものなのである。けれども、ここで話題となっていたのは、人倫的な実体における規定された内容であり、人倫的な実体におけるひとつの区別、たとえば善悪の区別だったのである。ところが、人倫的な実体を「ひととは知るべきである」というひと言葉だけで規定するとき、そこにあらわれる内容がむしろ完全に偶然的なものとなることは明らかである。たとえその内容が、普遍的なもの、必然的なものへと高められたとしても、知ることというものが「ひととは知るべきである」というような法則として語られてしまうと、内容は消えてしまうのである。

有名な命題を、もうひとつとりあげよう。「汝の隣人を、自分自身を愛するように愛せ」という命題である。この命令は、個々の人間と関係をもって、個々の人間に向けられたものであり、この命題が主張しているのは、人間と人間との関係とは、個々の人間が個々の人間と結び関係なのであり、【363】つまり、愛というような感情がとりむすぶ関係である、ということである。愛は活動をおこなうものとして存在する。というのは、活動をおこなわないならば、愛は愛として存在することはないし、それゆえ、愛が求められることもおこなわないからである。活動をおこなうものとしてある愛が目指すのは、悪を人間から分離し、善を人間に与えることである。そうしたことがなされるためには、人間における悪とは何であり、善とは何であるのか、目的にかかった善とは何であり、目的となるべき、人間の福祉とは一般に何であるのか、といった区別がなされなければならない。つまり、私は、そうした区別をおこなう悟性でもって人間を愛さなければならないの

である。悟性をともなわない愛は、愛された人間にとって有害であるし、おそらく、憎しみよりも有害である。けれども、悟性をともなった本質的な善行が、もつとも豊かでもつとも重要な形態をとるのは、それが、国家がおこなう悟性的で普遍的な行為であるときなのである。国家がおこなう行為と比べるならば、個々の人間が個々の人間としておこなう行為は、それについて語るための手間にもほとんど値しないような些細なことである。国家のおこなう行為は強大な力でもつてなされるから、個々の人間が個々の人間としておこなう行為が国家のおこなう行為に反抗しようとするとき、その行為に自分のちからでおこなえるのは、犯罪をおこなおうとするか、あるいは、愛する他者のために、国家という普遍的なものから、それが個々の人間に対してもつ権利と持ち分を騙し取ろうとするかの、いずれかなのである。個々の人間が個々の人間としておこなう行為は、どれもこれも無益であり、国家のおこなう行為によって圧倒され破壊されることになるだろう。愛という感情としてなされる善行が、個々の人間が完全に個々の人間としておこなう行為として意味をもつことがあるとすれば、それは、緊急時の援助という行為としてである。が、緊急時の援助も、偶然的なものであることに変わりはないし、しかも、つかの間の行為としてなされるものである。つまり、個々の人間がそうした善行をおこなう機会を手にするかどうかは偶然によって決まることであるし、それだけでなく、そもそもその善行がひとつの成果をもたらす仕事としてなされるかどうか、それがなされたときに再び無に帰することはないかどうか、それどころかそれが転倒してむしろ悪となることはないかどうか、といったことも偶然がそれを決めるのである。【364】それだから、他のひとびとの福祉のためになされる緊急時の援助といった行為が、なされないわけにゆかない必然的なものとして語られるとしても、そこで言われているのは、それはたぶんなされることがあるのだろうが、なされないこととたぶんあるだろう、といった具合のことなのである。偶然によってしかるべき事態が提供されれば、たぶんその行為は成果をもたらす仕事としてなされ、たぶん善なるものであるだろうけれども、そうでないこともたぶんあるだろう、といった具合のことなのである。そういうわけだから、「汝の隣人を、自分自身を愛するように愛せ」という法則は、最初に考察した「誰もが真実を語るべきである」という法則と同じように、普遍的な内容をもたな

いものとしてあるのである。もしそれが絶対的な人倫的法則であるならば、それは、そのものとして自分のちからで存在するような何かを表現するはずだが、それを表現してはいないものなのである。つまり、どちらの法則も「べきである」ということにとどまるものであり、現実性をもつことがないのである。それらの法則は法則ではなく、命令でしかないのである。

しかし、事からそのものの本性から実際に明らかになっているのは、法則が普遍的な絶対的な内容を与えるものではないということにとどまらず、そうした絶対的な普遍的な内容が断念しないわけにゆかないものとしてある、ということなのである。実体の本質は単純なものであるということであるわけだが、そうした単純なものとしてある実体は、どのような規定性がそこにおいて立てられても、それに適合することがないものとして存在する。命令が単純に絶対的な命令として語られるとき、その命令が表現しているのは、ただ存在するがままに存在している人倫的な存在なのである。そうした人倫的な存在のうちに区別があらわれるとき、その区別はひとつの規定性なのであり、それゆえ、それが人倫的な存在の内容であるとしても、その内容は、人倫的な存在という単純な存在のもつ絶対的な普遍性とならんで、絶対的に普遍的なものとして存在するものではなく、絶対的な普遍性の下位に存在するものなのである。そのようなわけで、絶対的な内容は断念されなければならないのだが、そのため、命令に帰属することができるとは、カントが言っているような形式的な普遍性だけとなる。つまり、命令には自分と矛盾したところがない、ということだけとなる。というのは、内容を欠いた普遍性とは、形式的な普遍性のことだからである。内容が絶対的なものであるということが意味するのは、区別でない区別が内容となっている、ということであり、つまり、内容のなさが内容となつていて、ということなのである。【365】それだから、法則を立てるということに残されたものとしてあるのは、普遍性という純粋な形式なのである。つまり、実際には、意識がおこなう同語反復である。この同語反復は内容に対立するものとしてあり、そこにおいてなされる知るということは、存在する内容について、つまり、本来の内容について知るということではなく、内容の本質を知るということ、つまり内容が自己同一なものとしてあることを知るということなのである。こうして、人倫的な本質は、それそのままでは、もはや内容であることは

なく、ひとつの尺度でしなくなっている。つまり、内容が、自分と矛盾することがないことよって、法則であることができるものになっているかどうかを審査する尺度でしなくなっている。法則を立てるものであった理性は、法則を審査することしかおこなわれない理性へと格下げされているのである。

C 法則を審査する理性

単純な人倫的な実体において善悪といったことがどのように区別されるかは、人倫的な実体にとつては偶然のことなのであり、我々が見たのは、その偶然性が、ひとつの規定された命令において、知ることの偶然性、現実のもつ偶然性、行為の偶然性としてあらわれてくるということだった。そのさいに、人倫的な実態という単純な存在と、その単純な存在に適合することがない規定性とを比較するということは、学的な立場にいる我々がおこなうこととしてあった。そしてその比較において明らかになったのは、単純な実体とは形式的な普遍性のことなのだ、つまり、純粋な意識のことなのだ、ということだった。純粋な意識がおこなうのは、内容から自由になり、内容と対立するということであり、そして、内容が規定されたものであることを知ることである。そのようにして、実体のもつ普遍性は、事そのものと同じものままであり続けているのである。しかし、その普遍性は、意識のうちでは、それとは別のものになっている。つまり普遍性は、無思想で惰性的な類ではなくなっている。【366】普遍性は、特殊なものに結びついたものとなっていて、特殊なものを支配する力、特殊なものほんとうのありかたとして存在している。―意識は、一見したところ、我々がさきほどおこなったような審査と同じことをおこなっているかのように見えるし、意識がおこなう行為も、すでに生じていることであるかのように、つまり、普遍的なものも規定されたものと比較するということであるかのように見えるし、その比較から結果として明らかになるのも、やはり、普遍的なものとして規定されたものとの不適合ということであるかのように見える。けれども、限定されたものとしての内容が普遍的なものにどのように関係するかは、普遍的なものがさきほどとは別の意味をもつものになっているために、別のものになっ

ているのである。つまり、普遍的なものは形式的な普遍性なのだが、それは、規定された内容をもつことができる普遍性なのである。というのは、この普遍性のうちでは、内容がただ自分自身とだけ結びついたものとして考察されるからである。さきほど我々がおこなった審査のさいは、普遍的で堅固な実体は、規定性に対立するものとしてあり、規定性が意識のもつ偶然性として展開されるにつれて、実体はその偶然性のなかに入り込んでいったのだ。が、ここでは、比較された二つの項のうちのひとつが消失している。普遍的なものもはや、実体として存在するものではなくなっている。つまり、そのものとして自分のちからで正義であるようなものではなくなっている。それは単純な知となっている。つまり、内容を内容自身と比較し、内容が同語反復となっているかどうかを考察する、ということをおこなう形式となっている。もろもろの法則があらためて与えられることはもはやない。すでに存在するもろもろの法則が審査されるだけなのである。もろもろの法則は、意識によって審査されるためのものとして、すでに与えられているのである。意識がおこなうのは、もろもろの法則という内容を、単純に内容として受け取るということだけであり、我々がおこなったように、内容としてある現実にとどのような個別的なもの、偶然的なものが付着しているかの考察へ立ち入るといことはおこなわれない。命令が命令としてなされるとき、意識はそのかたわらにとどまるだけである。意識が命令にどのように関係するかも単純である。つまり、意識は命令を審査する尺度として命令に関係するのである。

【367】けれども、以下の理由により、意識がおこなう審査が遠くに及ぶことはない。つまり、審査の尺度となるのは同語反復ということであり、命令の内容には無関心であるために、尺度はしかじかの内容も、それとは対立する内容も、同じように受け入れる、ということである。―私有財産が存在する、ということが、そのものとして自分のちからで法則となることなかどうかが問われているとしよう。そのものとして自分のちからで法則である、ということは、他の目的にとつて有用であるという理由によつて法則である、ということではない。人倫的な本質とは、法則が自分自身と等しいものとしてのみ存在しており、自分と等しいものであることによつて存在しており、それゆえ、自分の本質のうちに存在の根拠をもち、他のものによつて

制約されることがないものとして存在している、ということである。私有財産が、そのものとして自分のちからで存在するとき、自分と矛盾することはない。が、そのとき私有財産は、孤立した規定なのである。つまり、自身自身と等しいものとしてのみ立てられた規定なのである。自分と矛盾することないということならば、物が誰によっても所有されていない、つまり無所有であるという場合、あるいは、財産が共有されている場合も、同じなのである。あるものが誰にも属さないものとしてある場合もあるし、あるいは、たまたまそれを所有しているものに属する場合もあるし、あるいは、すべてのものにも属するという場合でも、おのおの欲求に合わせておのおのに属することもあるし、すべてのものに等しい部分が属することもあるが、いずれの場合も、それらの反対である私有財産の場合と同じように、ひとつの単純な規定性なのであり、形式的な観念なのである。—確かに、持ち主がない物が、欲求を満たすために必要不可欠の対象と見なされるとき、それが、誰かあるひとりの人間の所有物なることは必然的なことである。その場合、物が誰にも所有されずに自由であることを法則とすることは、むしろ矛盾したことだろう。けれども、物が持ち主不在であるというとき、そこで意味されているのは、物が絶対的に持ち主不在であるということではないのである。物は、個々の人間の欲求に合わせて所有されるはずもとしてあるし、しかも、物が所有されるのは、貯蔵されるためではなく、【368】ただちに使用されるためなのである。けれども、欲求に配慮するということを完全に偶然だけにしたがっておこなうということは、意識をもつ存在の本性には矛盾することであるし、そして我々がいま話題にしているのは、その、意識をもつた存在のことなのである。意識をもつ存在は、自分がいなく欲求を普遍性の形式において表象しないわけにゆかない。つまり、自分がこれからどのようにして生存してゆくかという生存の全体のことを配慮しないわけにゆかないし、生存のための持続する財産を手に入れないわけにゆかない。それが意識をもつ存在なのである。それだから、物は、自己意識をもつ生命に、その欲求に合わせて、偶然のまま、手当たりしだいに分け与えられるべきであるという考えは、自分自身との不一致をひきおこすものだったのである。—財産共有においては、欲求への配慮が、普遍的で持続的なたたきでなされることになる。つまり、財産の共有者の全員の欲求が、継続して配慮される

ことになる。が、おのおのが必要とする分がおのおのに分配された場合、分配は不平等になされることになり、そのことが意識の本質に矛盾することになる。ひとりひとりの人間は平等だ、ということが、意識の本質の原理だからである。かといって、平等の原理にしたがって、分配が平等になされたとしても、ひとりひとりの取り分は、ひとりひとりの欲求とは結びつかないものとなる。だが、ひとりひとりの欲求との結びつきだけが、取り分の概念なのである。つまり、取り分とは、もともとひとりひとりの欲求を満たすためのものであったはずなのである。

けれども、私有財産がないことが、そのようにして、矛盾したことであるかのように見えるとしても、そうしたことが生じるのは、私有財産がないことが、単純な規定性そのまま放置されなかつたからでしかないのである。私有財産の場合も、もし私有財産が単純な規定性として放置されることなく、もろもろの契機へと分解されるならば、同じことがおきることになる。個々の物が、私の私有財産であるとき、それは、普遍的なもの、確固としたもの、持続するものとして存在する。つまり、物は、どこにあつても私の私有財産であるし、私の私有財産であることが揺らぐことはないし、ずっと私の私有財産であり続ける。しかしそのことは、物の本性に矛盾することなのである。使用され消えてゆくということ物が物の本性だからである。物は、使用され消えてゆくものであると同時に、私のものとしても存在する。それが私のものであることを誰もが承認し、【369】私以外の誰もが私のものから自分を排除している。けれども、私が承認されたものとして存在するということのうちには、私がすべてのひとびとと平等であるということが、つまり、排除とは反対のことが含まれているのである。—私が所有するものとしてあるのは、ひとつの物である。つまりそれは、あらゆる他者に対して存在するものなのであり、全く普遍的なものなのであり、それが、私のために存在するものという規定をもつことはないのである。私が物を所有するということは、物をもつそうした普遍性に矛盾することなのである。それだから、私有財産は、私有財産がないことと同じように、すべての側面において自分と矛盾しているのである。私有財産と、私有財産のないこととのどちらも、個性と普遍性という、対立し合い矛盾し合うふたつの契機をそなえているのである。—しかし、個別性と普遍性というふたつの規定性のそれぞれが、単純

に、私有財産として、あるいは、私有財産のないこととして表象され、その表象がさらに展開されることがないならば、いずれの規定性も他の規定性と同じように単純なものとしてあることになる。つまり、自分自身と矛盾することはないのである。—それだから、法則を審査するためのものとして理性がそなえている尺度は、私有財産という法則にも、私有財産がないという法則にも、等しく適合するものとしてあるのであり、それゆえ、実際には尺度となっていないのである。—同語反復は、すなわち矛盾率は、理論的な真理の認識にとっては、形式的な基準でしかないものとして承認されている。すなわち、真理であるか非真理であるかといったことに全く没交渉なものとして存在している。その同語反復が、すなわち矛盾率が、実践的な真理の認識にとつては、そうしたものの以上のものであるとされることがあるとすれば、それは奇妙な成り行きであるにちがいない。

以前は空虚なものとしてあつた精神的な本質を満たすものとして、普遍性と個別性という二つの契機があるということについて考察したところだが、aでは、人倫的な実体に属するものとして、起源や正当性を問うことを介することないものもろの規定性を立てる、ということが廃棄され、続いてbでは、それらの規定性が法則となることができるものであるかどうかを知ろうとする、ということが廃棄されたのだ。【370】そのことをとおして得られた結論は、もろもろの規定された法則を立てることも、それらの法則について知ること、どちらも成り立たない、ということであるかのように見える。けれども、人倫的な実体とは、自分を絶対的な本質として意識するということなのであり、それだからその意識には、本質が区別もつことを放棄することはできないし、その区別について知るということを放棄することもできないのである。法則を立てることも、法則を審査することも、どちらも空しいことであるということが示されたということは、以下のことを意味することなのである。つまり、どちらも、個別的で孤立したものと受け取られるならば、人倫的な意識をかたちづくる、支えのない契機でしかない、ということである。両者が登場するさいにくりひろげた運動は、形式的には、人倫的な実体を意識としてあらわれさせる、という意味をもつものだったのである。

法則を立てることと、法則を審査することという二つの契機が、事そのもの

のについての意識をより詳しく規定するものである限りで、二つの契機は、誠実さのもつ二つの形式と見なすことができるものである。誠実さは、さきには、誠実さをかたちづくるもろもろの形式的な契機とともにさまようこととしてあつたが、ここでは、善であり正義であるものの内容として存在すべきものとともに、そしてその内容がどこまで確固とした真理であるのかの審査とともにさまようこととしてある。が、そのようにさまよいながらも、健全な理性と悟性的な洞察のうちでこそ、もろもろの命令は力をもつものとなるし、妥当性をもつものとなるはずだと思ひ込んでいるのである。

けれども、そうした誠実さがなければ、もろもろの法則は意識の本質ではなくなるし、もろもろの法則を審査することも、意識の本質の内部でなされる行為ではなくなるのである。法則を立てることと、法則を審査することという二つの契機のおおのが、自分のちからで、他を介することなく、ひとつの現実としてあらわれるとき、法則を立てることという契機は、もろもろの現実的な法則を妥当でないしかたで立て、存在させるということになつてあらわれ、法則を審査するという契機は、それらの法則からやはり妥当でないしかたで自由になるということとなつてあらわれるのである。法則を立てることという第一の契機にかんして言えば、法則が規定された法則であるとき、【371】それは偶然的な内容をもつことになる。—そのことが意味するのは、法則が、個別的な意識が立てた法則であり、恣意的な内容の法則である、ということである。そのようにして、起源や正当性への問いを介することなく法則を立てるということは、専制君主的な放埒である。すなわち、恣意を法則に変えることであり、人倫を法則への服従に変えること、つまり、法則であると同時に命令でもあることがないような、ただの法則への服従に変えることである。同様に、法則を審査するという第二の契機も、孤立させられるならば、動かさないものを動かすということを意味し、知の放埒を意味するものとなる。つまり、もろもろの絶対的な法則から自由に理屈をこねまわし、それらの法則を自分にとってよそよそしい恣意と受け取るという、知の放埒である。

法則を立てることと、法則を審査することという二つの契機が、いま見たような形式のうちにあるとき、それらの契機は、実体への、つまり、実在する精神的な本質への否定的な関係として存在することになる。実体がそれら

の形式のうちにあるときは、実体はまだ實在性をもたないものとしてある。意識自身が、起源や正当性への問いを介することなく法則を立てるということをおこなっているため、意識が含む実体も、いまだ、意識のそうしたありかたを形式としながら存在するものとしてある。実体は、ようやく、ひとり個人がおこなう意思すること、および知ることとして存在するだけなのである。つまり、非現実的な命令が命じる「なされるべきこと」が存在し、形式的な普遍性を知ることが存在するだけなのである。けれども、実体のそうした二つのありかたが互いに互いを廃棄するとき、意識は普遍的なものうちへ還ることになり、実体の二つのありかたの対立も消えることになる。実体の二つのありかたが、個々別々に存在するものではなくなり、廃棄されたものとして存在するものとなるとき、そのことをとおして、精神的な本質は現実的な実体となる。実体の二つのありかたが契機でしなくなり、それらが統一されるとき、その統一は意識の自己である。意識の自己が、精神的な本質のうち【372】立てられるとき、その自己が、精神的な本質を、現実的で、中身があり、自己意識をもった本質へと変えるのである。

このようにして、精神的な本質は、第一に、自己意識にとって、そのものとして存在する法則として存在するものとなっている。意識が法則の審査をおこなうさいの尺度となる普遍性は、形式的なものであって、そのものとして存在するものではなかったが、そうした普遍性が破棄されるのである。そして精神的な本質は、永遠の法則でもある。それは、個人の意思のうち根拠をもつものではなく、そのものとして自分のちからで存在するものである。それは、すべてのひとびとの絶対的な純粹な意思が、存在するままに存在するという形式をもったものなのである。その純粹な意思は、存在すべきものでしかないような命令であるのでもない。それは、存在し、すべてのひとびとにとって価値をもつ。精神的な本質は、カテゴリーの普遍的な自我であり、その自我が自我のまま現実なのである。そしてその現実が、世界なのである。存在する法則は絶対的な価値をもつものだから、自己意識はその法則へ服従することになるが、その服従は、自分の恣意のまま指図するような主人、自己意識がそこに自分を認識したことがないような主人に仕えることとは異なる。もろもろの法則は、自己意識自身の絶対的な意識がいただくもろもろの思想なのであり、自己意識の絶対的な意識はそれらの思想を直(しか)

にもっているのである。意識はそれらの思想を信じているのでもない。というのは、信じることは確かに本質を直観することではあるけれども、直観されるのは、よそよそしい本質だからである。人倫的な自己意識は、自己意識の自己が普遍的なものとしてあることによって、そのまま、本質とひとつのものとして存在する。それに対して、信じることは、個別的な意識がおこなう運動ではあるのだが、本質が自分のものとして存在するようになることはないのである。―それに対して、自己意識の絶対的な意識は、個別的な意識としてある自分を廃棄している意識であり、そこでは、自分を廃棄することを介するということが完全に実行されている【373】。そして意識が、そのまま人倫的な実体の自己意識であるような自己意識となるためには、自分を廃棄することを介するということが完全に実行されなければならないのである。

それだから、自己意識と本質そのあいだにある区別は、完全に透明なものになっている。そしてそのことによって、本質そのものもつものもろの区別項も、偶然的な規定性ではなくなっている。不同ということが生じるのは常に自己意識からであるわけけれども、その自己意識が本質と統一したものとしてあるために、本質がもつものもろの区別項は、生命(いのち)が浸透した分枝からなる群れとなっている。互いに対して透明で、仲たがいすることのないもろもろの精神となっている。区別のさなかにありながらも、本質がもつ無垢さと和とを分裂させることなく保っている、天上のもろもろの汚れなき形態となっている。―自己意識のほうも、本質のもつものもろの区別項と単純で透明な関係をもつものとして存在している。それらの区別項への自己意識の関係は、自己意識にこう意識される。それらの区別項は存在する、ただ存在する、と。それらの区別項は、ソフォクレスのアンチゴネーにとっては、神々の、書き記されることがなく、偽りとなることのない正義として存在した。

その正義の生命(いのち)は、今日や昨日だけのものではなく、永遠のものである。

それがいつからあらわれたのかを誰も知らない。それらの区別項は、ただ存在するものなのである。もし私がそれらがどのよ

うにして成立したものをかを問い、それらをそれらの源流点へと押し込めるならば、私はそれから外に出てしまっている。というのは、そのとき私はもはや普遍的なものとなっていて、それらは、制限されたもの、制約されたものとなっていてからである。それらが私の見かたに適うべきものとなるとき、既に私は、揺らぐことなく、そのものとして存在しているそれらを揺り動かしてしまっているのであり、私はそれらを、私にとっておそらくほんとうのことではあるけれども、そうでないかもしれないものと見なしてしまっているのである。【347】人倫的な心情をもつ、ということは、正義であるものうちにはじつと動かずに留まる、ということであり、正義であるものを動かしたり揺らしたり、源流点へ連れ戻したりということを一切おこなわない、ということなのである。あるものが私に預けられたとする。それは他人の所有物である。私は、それが他人の所有物であるがゆえに、それを他人の所有物として承認するのであり、私は揺らぐことなく、他人の所有物を預かるといふ関係のうちにある。もし私が、私が預かっているものを私のものとしたとしても、法則を審査するさいの原理である同語反復にしたがうならば、私はいかなる矛盾も全くおかしていないことになる。というのは、そのとき私は、私が預かったものをもはや他人の所有物とは見なしていないのであり、私が他人の所有物と見なしていないものを私が私のものとするということとは、完全に整合的なことだからである。見かたを変えることは、矛盾ではないのである。というのは、法則の審査のさいに問題なのは、どのような見かたがなされるかということそのことではなく、対象および内容としてあるものなのであり、それが自分と矛盾することがあつてはならないのである。たとえば、贈りものをするときにそうするように、私には、あるものを私の所有物を見なすことをやめて、それを他者の所有物と見なすことが可能であるし、そのことで、矛盾をおかしていると責められることはないが、それと同じようにして、私はそれと逆のことをすることもできるのである。—それだから、あることが正義であるのは、私がそこに矛盾を見いださないことよるのではないのであり、そのあることが正義だからなのである。あるものが他者の所有物であるということが、根底に横たわることとしてあるのである。それは、私がつべこべ論じるべきことではないのであり、そのことにかんするあれやこれやの考えであるとか、あれやこれやの関連事項とか、

考慮すべき事項とかを拾い集めたり、それらのことへ思いをめぐらせたりしてはいけないのである。【375】法則を立てるとか、法則を審査するとかのことを考えてもいけないのである。私の考えがそのような動きまわりかたをするとき、私は人倫的な関係を混乱させたのである。なぜなら、私は、私の好みに合わせて、正反対のことをも同様に、いかかなる規定ももたず同語反復だけにこだわる私の知に適合したものとすることができし、それゆえ、それを法則にすることができしからである。しかしかの規定が正義なのか、それともそれとは反対の規定が正義なのかは、そのものとして自分のちからで決まることなのである。しようとするれば私には、私が望む規定を法則にすることができし、同様に、どのような規定を法則にしないこともできし、そのようにして私が法則を審査するといふことを始めるとき、私は既に非人倫的な道についている。正義であるものが私にとって、そのものとして自分のちからで存在するということ、そのことによつて、私は人倫的な実体のうちに存在する。そのようにして、人倫的な実体は自己意識の本質となるのであり、そしてそのとき自己意識は、人倫的な実体の現実であり存在であり、人倫的な実体の自己であり意思なのである。